基督教叢書

八濱德三郎著

基督の比喩

目次

第一章 播種者
第二章 葡萄園の勞働者
第三章 十人の童女
第四章 兩銀
第五章 慈悲深きサマリヤ人
第六章 放蕩息子と其兄
第七章 パリサイ人と稅吏

東京 警醒社書店

258
344
特

020581-000-5

特18-42

基督の比喩

八浜 德三郎/著

M40

ABI-0396

特18
42

○紹介の辭

八須濱三郎君は京都洛陽教會の牧師にして、組合教會に在りて、健筆家の一人なり。明治廿三年リスチャンとなるや、間もなく傳道の志を起し、同志社神學校に入りて神學を修め、後、東京に移りて、福音毀書、基督教新聞等の編輯に關係し、後ち著述を事とせしが、其著「迷信の日本」の如きは、多くの人に愛讀せられたり。明治三十六年勝平られて洛陽教會の牧師となれるが、爾來其職責に盡瘁せり。

君は天性平民的の人、故に其文字思想、通俗にして而かも要領に當る。君が本書に於て其著の比喩を解するに、例を多く我國の事跡に求めたるが如きは、他人の及ばざる所なるべし。余は君の此小著が、廣く世に公にせらるべき君の著書「耶蘇の山上訓」と共に、長く信徒求道者間に愛讀せらるべきを疑はず。因て喜んで茲に八須氏と其著書とを大方に紹介す。

明治四十年十二月七日

基督教叢書編者　星野光多

明治
40 12 25
内交

基督の比喩

目次

第一章　播種者……一
第二章　葡萄園の勞働者……二二
第三章　十人の童女……四一
第四章　兩銀……五九
第五章　慈悲深きサマリヤ人……七一
第六章　放蕩息子と其兄……八五
第七章　パリサイ人と稅吏……一〇五

第一章　播種者

○播種者

馬太傳一三章（一—八—二三）

一當日イエス家を出て海邊に坐せしに二多の人々彼に集來ければイエスは舟に登て坐し凡の人々は岸に立り三イエス譬を以て多端の事を人々に語ひ種まく者播に出しが播るとき路の旁に遺し種あり空中の鳥きたりて啄み盡せり五また土うすき磯地に遺し種あり直に崩出たれど太日の出しとき灼れしかば根なきが故に槁たりセまた棘の中に遺し種あり棘そだちて之を蔽げり八また沃壤に遺し種あり實を結べること或は百倍あるひは六十倍あるひは三十倍せり

第一章　播種者

吾人前の章（十二章）を繙きて後此章に移らば、此比喩は主が悲しき經驗を爲したる日に語られし事を知らん、即ち主は反對者の嘲笑と侮辱とを受け、其母と兄弟にさへも誤解せらるゝに至る。此等の事情は自然彼をして自己が述べる所の教を受くる人心の樣々なる所以を語らしむ。折しも秋の初にして「實の園」と呼ばれたるゲネサレの湖は水清く、四面の山邊は秋の日影に照されて將に播種の好季節なるを知る。基督の教を聽かんとて集りし人々押合ふ程なりしかば、主は舟に乘りて少しく湖岸を離れ、此の播種の比喩を語り給ふ。主舟に乘りて山々の方を眺むれば、播蒔く者は播種に忙がはしく、而して鳥は其の後に舞ひ從ふて、其の幾哇か隔たるを俟ち、飛び下りて種子を啄み去らんとす。

地勢次第に傾きて斜面を爲せる田圃には、表面の直下に岩なる所も多く、其の畔には荊棘の唯だ苅取られたるのみにて、根こぎにせられ居らざる所も少からず。亦湖に近き邊には柔く、深く且清き沃壤も多し。主は此等の四種の地味を以て、四種の人心の比喩となし給ふ。

(二)路の傍に遺し種　四

此は神の教を聽くとも其の心に感ずること無き種類の人々を謂ふ。

(い)「路の傍」猶太の田圃は我邦の田圃の如く、畠と畠との間には人々の通行の爲め、又は馱馬荷車の通行の爲めに、畦路を設く、此等の畦路は人の足、又は車輪の跡にて踏み固めらるゝが故に、假令種子これに落つることあるも芽を吹き出すと能はざる也。此は學問や智慧や富貴に依りて、踏み固められたる強情にして高慢なる人心の比喩なりと謂ふべし。彼の禪宗の高僧退耕庵が東京谷中の全世庵に在錫の折しも、理學や文學や其の他いろ〳〵の博士先生達が打ち揃ふて參禪を乞ひしかば、和尚は先づ其の席に有合ふ茶碗に湯をなみ〳〵と注て諸先生に向ひ「さあ〳〵此の上にまだ〳〵湯を盛るべし」と告ぐ。諸先生笑ふて曰く「此上に注ぐ時は溢るゝ計にて何の益なし」と。和尚直に示して曰く「さあさあ其處である。子等が胸中には既に學問や智惠自慢にて滿足せるが故に、其處に禪を容るゝも何の益なし。若し禪の志あらば自ら學を忘れよ。智惠を忘れよ。生れた儘の赤子となり得るの活手段を捉へて後ち再び老僧が處に來れよ」と。實に喩へ得て妙と謂ふべし。基督の語に曰く「凡そ嬰孩の如くに神の國を承ざる者は之に入ることを得ざる也」「心の貧しき者は幸福なり何となれば天國は即ち其人の物なれば也」と。是れ實に深く味ふべきの言にあらず乎。殊に道を學ばんとするの初心者にして、此の赤子の心を缺きたらんには、到底その眞を究

ひること能はざる也。オーガスチン骨て諸生に教へて曰く「宗教を信ずるに第一の必要は謙遜也。第二の必要も謙遜也。第三の必要も亦た謙遜也」と。若し諸君が説教を聞くも何等の感動を得ず、聖書を讀ひも何等の興味を感せず、祈禱するも何等の應答を得ざる人あらば、乞ふ先づ高慢の心、強情の心を離れ、謙遜柔和なる赤子の心に歸れ、路の傍に落ちし種は芽を出すことなく、直に天空の鳥來りて啄み去るぞかし。

(ろ)空の鳥 旅行者の語る所に依れば、パレスチナには雀多くして、播種の季節には數人の農夫が田圃を馳せ廻りながら、大聲を發して之を追へるを看る。然れども數千の雀は忽ち群をなして地上に舞ひ下りて、今播きし計の種子を直に啄み去ると云ふ。博士フワーラーは此の句に解釋を加へて曰く「茲に謂ゆる空の鳥とは、説教を聞き終りし時の冷笑、會堂を出る時の皮肉の批評、家路に歸る時の冗談なり」と。惡魔は屢は

新聞の三面記事、小説、芝居、浮きたる樂、怠惰、我儘、肉欲などを以て、神の言葉を奪ふ、ホイットフヒルドが「此の小さき掌にても太陽を隱すことを得」と云ひしが如く、些細なる惡事と雖も我儕の靈魂を死と罪の淵に陷るゝことを得る也。道如上人曾て其の教を受けんと乞へる人を斥けて曰く「汝は今日袋を持參せざるが故に、假令教を説くとも無益ならん」と。客怪み問ふて曰く「袋とは何ぞ乎」と。上人答へて曰く「袋とは臨終の袋也」と。深く味ふべき言と謂ふべし。我等が眞面目ならざれば、如何に説教を聞くとも神に接するとも寸毫の効なき也。眞個に道に志さんと欲する者は先づ眞面目なれ。

(二)礫地に遺し種　五、六

此は神の言を聽きて直に之を信じたれども、艱難の爲め中途にて其の信仰を失へる種類の人々を謂ふ、(い)「土薄き礫地」とは路加傳に「石の上」と

あるが故に、其意味を以て説明せざる可らず。されば「土薄き磽地」とは岩石の表面に一寸、若くは二寸位の土の積れる所にして、石灰質の岩石に富めるパレスチナには斯る所少なからずと云ふ。地下の岩石は根をして深く土中に入ること能はざらしめ、且つ種子の成長を促すに足るべき太陽の熱を吸収して保存するが故に、其の種子をして容易く速かに成長せしむ。然れども、發芽の迅速なるは、迅速なる成熟と枯凋とを意味す。小早川隆景の言に「意見をして看るに、直ちに請合ふ者に其の意見を保つ者なし。意見をする人の言葉を聞きて、我が心に考へ合点ならぬと思ふ所をば、一問答も二問答もして、理に詰まりて後ち最も能く請くるものは後まで之を用ゆるもの也」と。流石は思慮深き名將の訓言と謂ふべし。此の比喩の「土薄き磽地」の種子の如く、基督教を聞くや忽ち早や呑み込みの安請合は、なか〳〵劍呑至極と云ふべし。始は

手酷く攻撃を加へ或は辯難したる人々にして一旦飜然と悔改むる如き者が却て死に至る迄も堅固不動の信仰を保ち居る場合多し。摯太の句に曰く「飛込んだ力で浮ぶ蛙かな」と。深く飛び込むに非ざれば高く飛び上ること能はざる也。今日の求道者には此の磽地の種子の如く、浅薄にして物に感じ易き性質の人多し。彼等は忽ち信じ忽ち疑ふ、宗教界の三日坊主なりと謂ふべし。蓋し彼等の病根は其の心中の甚だ深からざる所に堅き岩石を藏する事也。心中の岩石とは何ぞ乎、肉體の慾、金錢の慾、名譽の慾なぞを云ふ。我儕は神の言を受くると雖も、此等の慾が心中に潜めるが故に其の根を深く下すこと能はざる也。

(ろ)「根なきが故に」若し植物が充分深く根ざせしならば、太陽の熱に依りて生長發達するが如く、眞正の基督教徒は患難の熱に灼かれ、災禍の火に焼かるゝに連れ、信仰より信仰に進み、恩寵より恩寵に進む。然れど

も「土薄き磽地」に生じたる苗は、炎熱に灼かれて枯るゝが如く、一時のみの信仰は眞正の信仰を强むる所の同じ患難に依りて枯死すべし。俠客清水の次郎長なるもの、當世の學者を罵りて曰く、「頭ばかりの學問は實地に其丈の役に立たず、私の如き無學の者の考では學問は腹でせざる可らず」と。次郎長の一言深く我儕を警醒するに足らん。恰も根は外よりは看えざれども其の樹木を堅固ならしむるが如く、他人の眼には看えざる信仰の力は信徒をして持久堅忍ならしむ。又隱れて看えざる根に由りて養液を幹と枝とに送り、之が爲めに其の葉常に靑く其の實熟して止ざるが如く、基督と俱に神の中に隱れ在る所の生命は、信徒を强め勵まして成効せしむる力の源たる也。我友原忠美氏曰く「アヲは赤貧洗ふが如くなりて神の富の巨大なるを知り、無一物となりて神の萬物をも與へ給ふ聖旨を一層深く味ひたり。神の國と其義と

を求めよ、然らば此等の物は皆汝等に加へらるべしとの約束を實驗せり」と。恰も暴風が樹木の根をして一層深く土中に入らしめ、嚴霜が幹枝の纖維を益々結束ならしめ、洪水が地中の滋養物を溶解して樹木を生長せしめ、以て外來の障害に抵抗せしむるが如く、患難苦痛は信仰深き者をして愈々信仰に進ましむ。

(三)棘の中に遺し種　七

此は善良にして才智に富めるが故に、神の言を聞きて容易に之を信じたれども、此の世の思慮と貨財の惑の爲め、中途にして其の信仰を失へる種類の人々を云ふ。(い)「棘の中」、道の傍に遺し種子は肥し無きを示し、磽地に遺し種子は肥し少なきを示し。棘の中に遺し種子は肥し饒なるを示す。而も棘は思ふ儘に生長せしとあれば、其の土地は沃壤にして、且つ種子の爲めには頗母しき地たるや疑なし。彼の感情的の人物

は頗る感受性に富めるが故に、若し基督教を聽かば直に之を受け容れ、一時は滿腔の熱誠を傾けて之が爲めに盡し、宛から單騎敵陣を突くの慨ありと雖も、亦隨つて斯る人は此の世の誘惑に感染する事も容易なれば、其の熱心は何日とは無しに冷却し、遂には世俗の爲めに壓倒せらるゝに到る。此の棘の地とは斯る溫良眞率にして、而も多恨多情の人物に喩たる也。(ろ)之を塞げり」旅行家の語る所に依れば、ゲチサレ湖畔の夏又は秋には棘茂りて、爲めに馬も之を踏破して通過すると能はざる程に、高く且つ密に繁茂せりと謂ふ。則ち棘は良き種子よりも生長迅速なるが故に、空氣と日光を蔽ふて之れを達せしめず、且つ根に在る土壤の養と潤とを奪ふが故に、良き種子は生長したれども棘の蔭に在りて痩せ衰へ屈して伸ぶること無し。ウ井クリフは「棘そだちて之を塞げり」とあるを、「之を壓せり」と譯せるを看る。痩せ衰へたる一莖の小麥が、棘の爲め十重に二十重に束縛せられ壓倒せらるゝの狀を想ふべし。惡の勢力も亦た盛なるかな。(は)「棘」茲に謂ゆる棘とは、「此の世の憂慮と貨財の惑と各種の情慾」を指せる也。實に金錢と色慾とは惡魔が我儕を擒にするの途なりと謂ふべし。スコット曰く「金錢は人の靈魂を殺し、白刃は人の肉體を殺す、而して金錢は白刃よりも多くの人を殺す」と。蓋し此の種子は既に繁茂せる棘の中に落ちたるに非ず、棘の根が丁寧に取り盡されざる地、即ち鋤き耕す事の周到ならざる地に落ちたる也。「欲既に孕みて罪を生み、罪既に成りて死を生ず」(雅一〇一五)、願ふに此の農夫は一本か二本かの棘の根何かあらんと考へて之を輕忽に附せしならん。然れども棘は良き種子よりも生長すること速く、其の傳播力も亦た盛なる事を知らざる可らず。先年クインスランド政府は五千磅を懸賞として刺梨と呼ぶ精の強き灌木を絶滅する方法

を摹りしとぞ、刺梨は硼王樹の一種にして外見は頗る美麗なりと雖も、尖毛が一面に生じて觸るれば刺すの恐ある也、此の木は原來クインスランドの土產には非ず、近年一人の旅行者が或は其の外見の美に迷はされしにやあらむ、南亞米利加より携さへ歸りて此の國に移植せしに、非常の傳播力を逞ふして忽ち全國に播殖し、今は耕作に大なる害を與ふるに到りしかば、種々手を盡して之を防がんと務むるも防ぐこと能はざる也。斯の如く「貨財の慾と諸種の情慾」とは其の始は愉快に看ゆるも、根を人心に据ゑ付くるや否や、其の勢は頗る猛烈にして遂には其の人の全生涯を亡ぼすに到る。ジョン、アンゼル、ゼームスは英國に生れたる最も善良なるもの、彼れ老年に及び其の經驗を述べて曰く「予は曾て十五分間惡書を讀みし事ありしが、之に依りて得たる惡習は今日尙ほ之を癒すこと能はず」と。惡習の力は恐れても尙ほ怖るべきものかな。我儕は其の土地を淸むるに、唯だ荊棘の幹を伐り仆すのみに止むることと無く、根より堀出して全く之を燒き盡さゝる可らざる也。

八

(四)沃壤に遺し種

播きたる種子は或は鳥の爲め、或は磽地の爲め、或は棘の爲め、皆悉く消失する者に非ずして、其の幾分は農夫の辛苦の爲に生長繁茂すべし。

(ら)「沃壤に遺し種あり」路加傳には「沃壤に遺しは正しく且つ善き心にて道を聽き之を守り忍びて實を結ぶ者なり」とあれば、茲に「沃壤」とあるは「正しく且つ善き心」を指して謂へる也。而して「正しく且つ善き心」とは質朴、誠實、熱心にして其の受けたる所の神の言を妨げざる人の心を意味せる也。我儕は福音を聽くの前、先づ其の心の田畠を開懇して「正しく且つ善き心」となすに非ざれば、如何に基督教を聽くも更に詮なし。

(ろ)「實を結ぶこと或は百倍、或は六十倍、或は三十倍せり」百倍の實を結ぶ

ことは頗る奇なるが如く思はれども、ユダヤ、シリヤ、エジプト等の諸國にありては、間々ある所なりと云ふ。而して其の結べる果に百倍、六十倍、三十倍の差あるは、是れ神の言を受容る人々の信仰に程度あれば、其程度に隨ふて或は多く、或は少なく實を結べる事を意味せる也。

昔て東海道大磯の川崎屋孫右衛門なるもの二宮尊德先生に就きて廢家再興の途を問かんと欲せし時、先生は急き浴室より飛び出し、夜中二里餘を隔つる處に逃げ往きければ、人怪みて何故ぞやと問ひしに先生は眉を顰めて彼の如き難物は容易に道に入るべき者にあらざれば、假令仕法を敎ゆるとも益なしと考へたれば也」と答へしとぞ。家政困難を救ふは先生の得意とする所なりと雖も、之を爲すに當りて其の人の心を改良するを先となしたる事は、之を以て明白なりと謂ふべし。千代の句に曰く「千なりや莖一すぢの心より」と。百倍の實を結ぶも、六十倍或は三十倍の實を結ぶも、畢竟するに心と呼ぶ莖一筋の仕業なりと知るべし。二宮尊德の遺書に曰く「我道は人の心と云ふ田畠を開墾することと也。心の田畠さへ開墾が出來れば、世間の荒地を開くこと難からず」と。亦曰く「國家最大の損失は人の心の地面の荒れたる事にして其の次は田畠山林の荒れたる事也」と。誠に知言と謂ふべし。即ち田畠に雜草の茂れるは其の持主の心に雜草の生長せる徵にして、一家が亂雜にして整頓せざるは其の主人の心が亂雜にして整頓せざる證據と看るべし。實に大切なるは心田の開墾にこそ、我儕の心田にして沃壤たるに到らば百倍、六十倍、三十倍の實を結びて神の榮を彰はすこと容易なりと謂ふべし。

此の比喩の中に畫き出されたる四種の心狀は不變不動の者に非ざれば、前の三種の土地柄に類似せる人々と雖も決して失望する勿れ。即

ち踏み固められたる畠は柔げられ、土淺き畠は深く耕され、荊棘の茂れる畠は荊棘の根盡く除かれて沃壤となるの望ある也。而して如何にせば之を沃壤たらしむることを得るやと謂ふに、農夫の手に俟つに非ざれば種子も土地も、自ら之を耕耘すること能はざるが如く、我儕も心靈界の農夫たる(約十五〇一)神に依るに非ざれば、自ら其の心田の磽地を耕し棘を除くこと能はざる也。恰も農夫が踏み固められたる地を耕すが如く神は能く人の心の畠を開拓し得べし、故に我儕の心田をして沃壤たらしめ、以て神の言をして百倍の實を結ばしめんと欲せば「お神よ我が心を清くし、吾が正しき心を新にし給へ」との詩篇作者の祈禱をして我儕の祈禱たらしむべし。果して然らば神は善行の實を饒かならしめんが爲めに、涙と悲と苦の犂鋤を以て我儕の肉欲と利己心と不信心の下層土を深く開拓し給はん。「神の懲し給ふ人は幸福なり。然ば汝ぢ全能者の儆責を輕んずる勿れ」(約百五〇十七)、然らば其の開拓せられたる土地は、瞬間を出ずして心靈の實を繁く結ばん。「耳ありて聽ゆる者は聽べし」。

第二章　葡萄園の勞働者

○葡萄園の勞働者

馬太傳二十章一—十六

一 それ天國は朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し 二 工人には一日に銀一枚を予へんと約束をなし彼等を葡萄園に遣せり 三 また九時ごろ出て街に徒く立る者を見て 四 爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を予へんと彼等に曰ければ即ち往り 五 また十二時と三時ごろ出て前の如く行り 六 五時ごろ出て又ほかの立る者に遇て曰けるは何ゆゑ終日こゝに徒く立や 七 之に答て曰けるは我儕を雇ふ者なきに因てなり彼等に曰けるは爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を得べし 八 日暮るとき葡萄園の主人その家宰に曰けるは勞力たる者等を呼て後に雇へる者を始とし先の者にまで價を給へよ 九 五時ごろに雇はれし者ども來りて銀一枚づつを受たり 十 先の者ども來りて我儕は多く受るならんと意ひしに亦銀一枚づつを受く 十一 これを受て主人を怨みつぶやきけるは 十二 この後至者の勞力たるは一時ばかりなるに終日くるしみを任あつさに當る我儕と均しく之をなせり 十三 主人その一人に答て曰けるは友よ我なんぢに不義をせず爾と銀一枚の約束をなしたるに非ずや 十四 爾のものを取て往け われ亦この後至者にも爾の如く予ふべし 十五 我物を以て我おもふ如く行は宜らず乎 わが善に因て爾の目あしき乎 十六 此の如く後の者は先に先の者は後になるべし 夫よばるゝ者は多しと雖も選るゝ者は少なし

第二章　葡萄園の勞働者

此の比喩は、前章の終りの四節に密切なる關係あれば、此の比喩を正しく解せんには、此の四節を參照せざる可らず。基督は「我儕一切を棄て汝に從へり然ば何を得べき乎」とのペテロの高慢にして嫉妬に充てる問に對して此の比喩を語り給ひし也。

(一)勞働者と雇主　一—七

天國即ち神に事ふることを以て葡萄園の勞働者に譬ふ、以て其の多忙にして勞役の必要なる事を知るべし。彼の國の俗に葡萄園に傭はれんとする者は毎朝市街に立ちて雇ふ者の來り探すを俟つ、則ち此の比喩に在るが如く葡萄園の主人は朝早くより勞働者を探し、九時頃に至りて空しく立てる者を葡萄園に遣し、十二時、三時、五時の頃に於ても尚

は茫然として佇立せる者に逢ひしかば、痛く其の怠惰を責め悉く彼等を葡萄園に送れりと云ふ。此の一段に於て學ぶべき教訓は、神が我儕人間の心靈上の無頓着を責め、品性と信仰の修錬の爲め神國の活動に入れと命じ給ふ事也。茲に「街」と譯せるは原語「アゴラ」にして、「アゴラ」は多く人の集りて討論會議し、罪人なぞの吟味を爲し、或は物を賣買する市場を指す、故に假令軍人又は政治家となりて國家の爲めに盡し、或は實業界の大立物となりて辣腕を揮ふと雖も、若し其の心に神を信ずるの念なく、高尚なる生活を慕ふの志乏しく、唯だ肉欲と金錢の間に起臥するのみならば、畢竟「街に空く立る者」即ち心靈上の怠惰者に他ならざる也。大閑が辭世に「露と起き露と消へぬる我身かな、浪華の事は夢の世の中」と歌へるが如く、神なき者の一生は畢竟夢に他ならざる也。葡萄園の主人は斯る心靈上の怠惰者に向ひて「何故終日此處に立つ乎」と叱責し、「汝等も葡萄園に往け。相當の價を與ん」と促し給ふ也。先頃逝去せる福地源一郎氏の事に就き大槻如電氏の語れる所に依れば、予は病床に福地を訪ひしに非常に衰弱して聲なぞ極めて低く、耳を口の邊に持ち往かざれば聞えざる位なりし。福地は予を看て淋しげに一笑し、「先生到頭罰が當つて此樣な業病を引受けて死ぬのだ」と云へり。予は其の容體を看て最早や長くとも一二週間の壽命と思ひしが故に、「耶蘇の教でも老子又は儒教でも皆な詰りは同じ事だ。お互に六十年間學問を仕たのは何の爲めであるか、最期の時の覺悟ではないか、凡の事唯だ泰然自若の四字あるのみだ」と告げしに、流石の福地も幾度も默禮をして予の言を謝せり。實際福地に引導を渡して遣りし者は予と謂ふべしと。其の死に處して力なく望なき態は眞に憐むに堪ゆ、曾ては日本一の才物と呼ばれ、智惠者と歌はれし者も、其の臨終の際には僅に「泰

然自若」の四字に勵まされ、愛我慢にも漸く死の哀に堪へしとは何等の事ぞ。願に福地源一郎氏は一世の人物にして吾人の尊敬すべき人ならんと雖も、心靈上に於ては「街に徒く立る」精神的怠惰者たるを免かれざる也、彼等は王陽明が「山中の賊を平ぐる事は易けれども心中の賊を平ぐる事は難し」と絶叫せし如き、亦た使徒パウロが理想いや高くして實行の擧らざるを悲み「アヽ我れ困苦の人なる哉」と浩嘆せし如き、心靈上の眞面目を缺ぐる也。彼等は「我儕を雇ふ者なきに因てなり」と辯疏する事を得る乎、別言せば「我儕が神を信せざるは神を知らざるに因る」と回護することを得る乎。ボストン府にヘレン、ケレルと呼べる一少女ありし。彼女は不幸にして耳聞えず、物云ふこと能はず、眼視ることと能はざる生來の不具者なりし、盲と啞と聾との爲めに彼女の心は外界に觸るゝこと能はざるを以て何物も彼の心に入ること能はざりし。

然るに驚くべき醫術の進歩に依りて此の不幸なる少女は見聞き語る樣になりしかば、一日宗教的開發に就きピリップス、ブルックス氏に教を乞へり。ブルックス氏は徐ろに口を開きて神の事を語りつ、神は何を爲し給ひし乎、如何に人類を愛し給ひし乎、又如何に我儕に對し給ふ乎を語りけるに、小女は合點しつゝ聞き終りて曰ふらく「ブルックス君よ妾は早ぐより唯今先生の御話になりし事を知りぬ、然れども神てふ名を知らざりしのみ」と。人は眞に心靈上の眞面目に歸れば、神を信ずるの念に燃え、高尚なる生活を慕ふの情に堪へざる也。「何故終日此處に徒く立つ乎」基督は九時、十二時、三時若くは黃昏の五時に到るも、街に立ちて我儕を招き給ふ、基督教は人が神を求むるに非ずして神が人を求むるの宗教也。我儕の心中に苦痛悲哀の感切に、高き或物を慕ひ求むるの念勃れるは、是れ神が我儕を招き給ふ聲なれば、空しく神の招き

を拒む勿れ。

(二)勞働者と勞役　同上

此の比喩の中に九時、十二時、三時、或は五時とあるは、一日を人間の一生と看て、九時又は十二時は人生の朝たる青年時代にして、三時又は五時とは最早や人生の夕景たる老年時代を云ふ、則ち神は朝より夕まで、年頭より歳暮まで、少年より老年まで、人を驅りて葡萄園の勞働に從事せしむ、朝はやく雇はれしものは「我儕は何を得べき乎」と賃銀の額を尋ぬ、「銀一枚を與へん」との約束を聞きて漸く葡萄園に往きしも、九時、十二時、三時に雇はれしものは、朴直なる精神の者なりしかば、唯だ「相當の値を與へん」との主人の言を信じて往けり。殊に原文には七節の終に在る「相當の値を得べし」との語なきを以て看れば、人生の黄昏近き五時と云ふ老境に至りて雇はれしものは、賃銀の額には心を留めずして、唯だ神の恩寵の優渥なるに感激して葡萄園に往きしもの也。斯く勞働者中始の組と後の組と、其の賃銀の約束同じからざるを明示し、而も基督が此等の勞働者を評して「後の者は先に、先の者は後になるべし」と言はれし事を觀ば、此の一段には格別の教訓なかるべからざる也。頃日「二宮翁夜話」を讀みしに

川久保民次郎と云ふ者あり、翁の親戚なれども貧にして翁の僕たり、國に歸らんとして暇を乞ふ。翁曰く夫れ空腹なる時、他に往きて一飯を給はれ、予庭を掃んと云とも、決して一飯を振舞ふ者あるべからず、空腹を耐へて先づ庭をはかば、或は一飯にありつく事あるべし。是己を捨て人に從ふの道にして、百事行はれ難き時に立至るも行はるべき道也。我若年初めて家を持し時、一枚の鍬損じたり、隣家に往て鍬を貸し呉れと云ふ。隣翁曰く今此畑を耕し菜を蒔かんとする

處なり、蒔き終らざれば貸し難しと云へり。我家に歸るも別に爲すべき業なし。予此畑を耕して進ずべしと云て耕し、菜の種を出されよ、序に蒔て進せんと云て耕し且つ蒔て、後に鍬を借りし事あり。隣翁曰く鍬に限らず何にても差支の事あらば、遠慮なく申されよ、必ず用達べしと云へる事ありき。斯の如くすれば百事差支なきもの也。汝國に歸らば新に家を持つ事なれば必ず此の心得あるべし。夫れ汝未だ壯年なり。終夜寢ざるも障りなかるべし。夜々寢る暇を勵し勤めて草鞋を一足或は二足を作り、明日開拓場に持出て、草鞋の切れ破れたる者に與んに受る人禮せずと云へども、元寢る暇に作りたるなれば其分なり。禮を云ふ人あれば夫れだけの德なり。又一錢半錢を以て應ずる人あれば是又夫れだけの益あり、能く此の理を感銘し、連日怠らずば何ぞ志の貫かざる理あらんや、何事か成ざるの理あらんや。

此の二宮尊德の教訓に照して、先の工人と後の工人との貸銀の約束同じからざる事、並に基督が先の工人を貶して後の工人を褒めし事を味ひ、更に一段の妙味を覺ゆるに到らん。「人汝に一里の公役を強ひなば之と共に二里往け」(太五、〇四一)、義理と慾に強ひられて一里往くは奴隸の途也。外部よりは毫も強ひられず、假令爲すも爲さゞるも何等の損得なき場合に、自ら好み勇みて夫れよりも以上の事を爲す、則ち二里往くは基督の途也。古人の句に曰く「影膳に蠅追ふ妻の操かな」と。良人の留守に影膳を供ふるは妻の義務なれども、其の影膳に蝿集せる蠅を追ふは義務以上の行爲也。又曰く「馳馬に鞭打つの義務はあらざれども早きが上にも速からん事を願ふて、馳馬に鞭打て駈け出すは義務以上の行爲也。此の義務以上の行爲

を盡し、勞して怨みざるは基督の教の眞髓なりと知るべし。則ち先に備はれしものは齡壯にして筋骨の逞しきものなりけむ、「銀一枚」の貸銀の爲めに勵まされて葡萄園の勞働者となりしも、後に雇はれしものは齡傾きて歩一歩、墳墓の傍に近づける者なれば、自己の價値なきを痛く感じて、斯る者をも召し給ふ神の洪大なる恩寵に泣き、貸銀の如きは目をも掛けずして葡萄園に往きしもの也。後の者の行爲は感激の行爲なれども、先の者の行爲は利慾の行爲也。是れ基督が先の者を貶し後の者を褒めし所以なりと知るべし。

(三)勞働者と貸銀　八、九

「日暮るゝ時」即ち人生の日影移りて我倅が死する時、雇主なる基督は先づ後に雇はれしものを呼び出して、終日苦み且つ炎熱を冒して働ける、先に雇はれしものと共に「銀一枚宛」の貸銀を與へ給ひしかば、先の者等は雇主の處置に不滿を抱きしと云ふ。此の一段に於て神國に於ては事業の多寡よりも其の精神を尊ぶ事を敎ゆ。二宮尊德が野州物井村の荒蕪を開墾せし時、其の役夫の中に六十才位の老人ありしが、終日孜孜として木の根を堀て止まず、人休めども休まずして汲々として勵む。人之に休めよと云へば彼れ笑て曰く、壯者は休むと雖も終日の働き餘あり、予既に年老い力衰へぬれば、若し壯者と共に休まば何の用を爲さんやと。監督の吏これを看て彼の老人の日々木根のみに心を用ゐるは、開墾の勞を人と共にするを厭へばなり。毎日の働き他の役夫の三分が一にも及ばず、先生何が故に斯の如き無益の老人を退けざるぞ、明智の一失なりと云て窃に之を嘲る。後數日にして開墾成就せしかば、二宮尊德は直に此の老人を陣屋に呼び、金十五兩を與へて曰く、汝衆人に抽て丹精の働きを爲たるが故に、聊か賞美として之を與る也と。老

人大に驚き金を頂き謹で之を戻し、色を變じて曰く老夫が力役夫に當るに足らざるに等しく賃銀を給ふ、實に恩惠身に餘れりと謂ふべし、然るに今その實なくして大金の賞を得ること某身を置くに處なし、某決して賞に應せずと云ふ。先生曰く汝辭すること勿れ、汝の勞働或は壯者に及ばざる事あらんも、汝の正直なる精神は賞せざる可らざる也、若し汝を賞せずして諸人と共に同視せば爾來何を以て土功を擧げん乎。今與ふる所の財は天汝の正直を憐みて下し給ふものなりと思ひ、速に持ち歸りて貧苦を免れ老を養ふの一端ともせば、我も亦之を悅ぶなりと敎へ再び之を與ふ。是に於て老人先生の言に感動し流涕衣を沾し、合掌拜伏して謝辭を盡すこと能はず、再三金を戴きて故鄕に歸れりと云ふ。人の働きの大小輕重は以て世を眩惑するに足らんと雖も、人の心の隱微をも知れる神を欺くこと能はざる也。靈界に於ては事業の多寡よりも精神を尊ぶ。顧に我僻の中にも此の老人の如く日々忽々として木根を堀るのみにして、壯者の三分が一の働きをも爲すこと能はざる人あらん、而して人間の眼には無益なるが如く看ゆる事あらん。然れども焉んぞ知らん神の前に於ては壯者と共に同一の報酬を受け、而も「後の者は先に先の者は後になるべし」との賞詞を得んとは、寡婦のレプタも富める者の多く投ずるに優りしに非ず乎。愚者も弱者も心強く感ずべきは天國の事業也。眞に基督を愛するの心だにあらば、冷水一杯も神の前に於て大なりとせらるべし。

(四)勞働者と嫉妬　十—十五

先に雇はれしもの雇主の處置に不滿を抱き、遲く雇はれし者の、己等と均しき賃銀を與へられしを憤ふりしかば、主人之に答へて予が後の者に銀一枚の賃銀を與へしとて汝等の非難を受くる筈なし、汝等には既

に約束の銀一枚宛を與へしに非ず乎、我が物を以て我が思ふ如く行ふに何の不都合かあらんやと云へり。此の一段に於ては嫉妬は神の惡み給ふ大罪なる事を敎ゆ。ソクラチース曰く「嫉妬の人は其の隣人の肥ゆると共に痩するなり、嫉妬は傲慢を產み、凶殺復讐を造り、秘密なる反亂の發頭たり、德の仇敵たり、嫉妬は心の穢はしき汚泥なり、肉を蝕くし骨髓を干す毒物なり」と。實に他人の成効を看て嫉妬し、他人の失敗を聞きて愉快を感ずるとは、其の愚實に笑ふべく信じ難きに似たれども、是れ眞に人生の事實たるを奈何せん。嫉妬は常に他人の幸福を惡む。我儕は優者に對しては己れの彼れに及ばざるを看て嫉妬し、劣者に對しては彼れの己れに及ばんとするを看て嫉妬し、同輩に對しては彼れ己れと同等なるを看て嫉妬し、終に嫉妬の眼を以て他人の言行を邪推し、惡言を放ち爭鬪を釀し、不德の極に陷らずんば休まざる也。歐

グレゴリー曰く「嫉妬深き人は必ず不幸を招く、是れ己が不運なるが爲に非ずして、他人の成効するが爲也、而も我が好運に向ふ事を喜ぶよりも、其の隣人の禍に罹る事を祝するの情一層切なるを覺ゆ」と。實に嫉妬なき人に取りては大に滿悅すべき事柄も、却て非常なる憂悶の種となり、鬱々として其の生涯を送り了らざる可らざる也。彼の暴虐なるダイオニショスが音樂師フィロクセノスを善く彈するが爲めに刑し、哲學者プラトーを其の聲望己れの上に出づるが爲めに罰せしば嫉妬に因るに非ず乎。波斯王カムビセスが其の兄弟スマルヂスを己れよりも强き弓を引きしが爲めに殺せしも嫉妬に因るに非ず乎。皇帝カリグラが其の兄弟の容姿の美なるが爲めに殺せしも嫉妬に因るに非ず乎。其の姿の美なる、其の力ある、其の學ある、其の智ある、一として嫉妬の情を起すの媒たらざるは莫し。嗚美なるを看て憂へ、秀づるを看

ては惡む、何たる哀むべき悲むべき狀態ぞ乎。「嫉妬の人は其の隣人の肥ゆると共に痩す」とは、實に我儕の胸中の秘密を暴露せるの言にはあらず乎。斯る惡德の解毒劑として此の比喩は我儕に何を敎ゆる乎、曰く十四節の「汝のものを取て往け」との一語是れ也。我儕は街に徒く立ちて神の國に入ることを知らざりしもの、若し神の招きなかりせば永遠までも斯くてあるべかりし也。然るに神は洪大なる慈愛を以て朝早く我儕を葡萄園に招き、九時、十二時、三時を過ぎ五時に至る迄も我儕を招き給ひしが故に、我儕は今日葡萄園の勞働者たる事をぞ得しなれ、然らば我儕の今日あるは自己の價値に非ずして全く神の惠なれば、我儕は自己の幸福を誇ること能はず、他人の幸福を妬むこと能はざる也。「汝のものを取て往く」是れ我儕の義務なりと謂ふ可し。「汝のもの」若し病ならば之を樂むべく「汝のもの」若し貧ならば之を味ふべし。使徒保羅の云へる「吾れ如何なる狀に居るもそれを以て足れりとする事を學べば也、吾れ貧賤に居るの道を知り、亦た富に居るの道を知り、飽くことも、飢ることも、豐ことも、乏しきことも、凡ての事に於て吾れ之を熟錬せり」との言は、移して以て本節の脚註となすべし、「後の者は先に、先の者は後になる也」耳ある者は聞くべし。

第三章

十人の童女

○十人の童女

一其のとき天國は燈を執て新郎を迎に出る十人の童女に比ふべし二その中の五人は智く五人は愚なり三愚なる者は其燈をとるに油を携へざりしが四智き者は其燈と兼に油を器に携へたり五新郎おそかりければ皆假寐して眠れり六夜半ばに叫びて新郎きたりぬ出て迎へよと呼聲ありければ七この童女ども皆おきて其燈を整へたるに八愚なるもの智き者に曰けるは我儕の燈燃んとす願くは爾曹の油を我儕に分予よ九智き者もの答て曰けるは我儕と爾曹とに恐くは足まじ爾曹賣者に往て己が爲に買へかれら買んとて往しとき新郎きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉られたり十一斯て後その餘の童女きたりて曰けるは主よ主よ我儕の爲に開たまへ十二答て我まことに爾曹に告ん我は爾曹を知すと曰り十三然ば忌らずして守れ爾曹其日その時を知ざれば也

第三章　十人の童女

基督は其の死期の近づけるに臨み、此の比喩を以て未來審判の狀態を述べ、常に之が爲に準備を爲すべき事を敎へ給ひける。（其時天國は燈を執りて新郎を迎へに出る十人の童女に比ふべし）（一節）「其時」とは未來審判の時にして、切言せば人間が死する時を云ふ。古昔の大宗敎家の中には天國を形容して「戰場」又は「狩獵」と云へる者あれども、基督は屢ば天國を形容して「婚姻」と呼び給ひける。蓋し婚姻は人生に於ける最も愉快にして且つ幸福なる事なれば、天國の愉快と幸福とを形容するに最も適せりと謂ふべし。

ユダヤの婚姻は夜間に其の儀式を行ふが故に、松明を照して新郎を迎ふるの風專ら行はれし也。婚姻の日には新郎は其の友と共に新婦の家に往き、盛筵を張り歡樂を盡して新婦を

己が家に伴ひ歸る。新婦は數名の童女に侍せられ新郎と共に父の家を出で新郎の家路に赴く。此の比喩の十人の童女は此の新郎と新婦とを迎へんが爲めに、手に〳〵松明を携さへ途中より此行列に加はりて他の客と俱に宴席に入る。「其中の五人は智く五人は愚なり」(二節)、

ユダヤにては一組を十と數へ半組を五と數ふるが故に、茲に十若くは五と云へる數には特別の意味あるに非ず、唯だ童女を善惡の二個に區別するに在るのみ。蓋し此等の童女は如何なる點に於て或は智に或は愚なるかと云ふ。「愚なる者は其燈と共に油を携へざりしが、智者は其燈と兼に油を器に携へたり」(三、四節)、是れ此比喩の要點なりと知るべし。「燈」とは外部の行爲にして「油」とは其の行爲を勵ましめ、之を活かす所の內部の信仰を指せる也。油の乏しき洋燈は一時その光を放つことを得れども、其の光の源なる油なければ風をも待たずして直に消失するが如く、此の愚なる童女流の信者は、一時は信仰に燃えて人々の前に輝く燈なれども、其の信仰の油に乏しければ、少しの試練に逢へば直に消失するに到る。聖書には信者を燈、ランプ若くは蠟燭に譬ふる所多し。試に其の一例を擧ぐれば「汝等は世の光なり、燈を燃して斗の下に置く者なし、燭臺に置て家に在る凡ての物を照さん、此の如く人々の前に汝等の光を輝かせ、然ば人々汝等の善行を看て天に在す汝等の父を榮むべし」(太五〇十四—十六)、敢て問ふ我儕は智き童女の如く其燈に油を備へ居る乎、將或は愚なる童女の如く油なき燈に非ず乎。曾て同志社出身の一青年が傳道の爲め北海道に往かんとせし時、折しも京都に靜養せる荒尾精氏に面會し、何か送別の爲めに書き與れよと賴みしに荒尾氏は快く承諾して直に紙を展べ、墨痕鮮かに「蠟燭」の二字を大書しける、之を觀て青年は其の意を解し兼ねて、之を荒尾氏に糺せし

に氏は答へて曰く「燈燭は己が身を耗して他を照すものに非ずや、傳道の事亦その精神を以て從事せざる可らず」と、實に肇へ得て妙なりと謂ふべし。燈燭の目的は唯を照すに在るが如く、基督信者の責任は一身、一家、一村、一郷、果は一國の暗を照す事に他ならざる也。聞く米國の某海岸の燈臺守を勤むる一人の老翁は、捕鯨船に乗込める息子の歸來らざるを憂ひ、雨の夜も風の夕も燈臺の火を輝かして待ち詫びつ、既に捕鯨船の歸來れる時に向ひしかば、其の夜も常の如く燈臺に登りしに折しも暴風吹き荒みて怒濤高く天を呑むの光景、老人は息子の乗れる舟の看えざるに待ち詫びてうと〳〵眠を催しけるに、憐れ其の間に燈臺の火は風に吹き消されける。老人は如何なる夢路をや辿りけむ、父よ父よと呼ぶ息子の聲に夢を破られて眼を拭へば、何時の間にやら燈火は消えて室内は黒暗々なるに驚き海岸に馳せ出で眺ひれば、一隻の舟は波に碎かれて海岸に打ち上げられ、其の傍に青年の死屍の横はれるを看る、凝視するに焉んぞ知らん之ぞ日夜待ちに待ち、慕ひ焦れたる愛子の死骸ならんとは、我儕の中には此の老翁の如く其の燈を輝かすことを懈怠せし爲め、愛する妻子をして不信仰、不品行の罪に陷らしめつつ在る者は非ざる乎。

此の愚なる童女は如何なる種類の人々を意味するやと云ふに、彼等は信仰を有せざりしには非ずと雖も、其の信仰は一時の信仰にして試練に耐へ、難を忍ぶこと能はざりし也。之に反して賢き童女は如何なる種類の人々を意味するやと云ふに、彼等は「新郎の來る事」即ち自己が神の國に往き、若くは神の國が自己に來る迄は、長く忍耐と克己との生涯を送らざる可らざる事を覺悟せる者也。之を要するに忍耐と克己との有無は賢き童女と愚なる童女との相別るゝ岐路なりと謂ふべし、

「新郎遲かりければ皆假寐して眠れり」(五節)、我儕は自己の健康や年齢や醫藥や、此等の物を恃みて「新郎遲かりければ」即ち死の來ると遲ければ、とて此の童女等の如く目前の事物に心を寄せ、主の聲を聞くも遽に睡を覺さゞる迄に惰眠を貪りつゝあるに非ず乎。殊に童女の睡眠の順序に注目すべし。彼等は最初うと〳〵假睡せしも、遂に熟睡の境に陷りて動搖するも覺めざるに到る。恰も音樂を學ばざれば音調の神經が鈍れ、光線に接せざれば眼の視力を失ふ如く、名利の念は勤勉の精神を奪ふて意志を薄弱ならしめ、無頓着の心は宗教心を消沈せしめ、放蕩の所行は良心を腐蝕せしむ。故に我儕は信仰上の假睡の時期に警醒して、熟睡の狀態に陷らざらんことを努むべし。「夜半ばに叫びて新郎來りぬ出て迎へよと呼ぶ聲ありければ」(六節)、茲に謂ゆる「夜半」とは唯だ人々の熟睡する時、若くは不意の時との意に他ならざる也。古歌に明

日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは」或は「つひに往く道とは兼て聞しかど、昨日今日とは思はざりしに」と云へるは、人間の壽命の老少不定を歌へる也、諺に「人生僅か五十年」と云へども、統計上に依れば人間の五割は二十歳以下に於て死去し、五十歳以上も生存する者は一千人中の三十九人なりと謂ふ。實に人間の一生は春の夜の夢の如く、風の前の塵に同じきかな、昔、波斯王ザーキセスは、百萬の大軍を引具して希臘の國を攻る時、途次小丘に登りて眼に餘る大軍を見渡しながら「アヽ今より百年の後ち此の多人數の中に生存するもの幾人かある、さても果敢なきは人間の生命かな」と嘆息せりと傳ふ。予は思ふ今後百年は思か三十年、否な二十年の後ち此の會衆の中に生存せるもの、果して幾人あり乎。予は若王寺山頭に登る毎に、思はざる人々の死去せるを看て、其の順番は何日何時わが身の上に廻り來るかと感慨を深う

する也。「紅葉を風にまかせて見よりも、はかなきものは生命なりけり」。先年綱島牧師が中上川彦次郎氏を訪ひ、既に澁澤男も外山博士も出演せられし事なれば、今回は是非とも貴下の出演を望む、とて一場の演說を依頼せられしに、氏は答へて「博士は口より先に生れし人、亦た男爵は最早や片足を棺に入れ置く老人なれば、或は急ぎて演說するの要もあらん、然れども予の如きは春秋に富める壯漢の事なれば、公衆の前に起て演說なぞするの時期に非ず」と辭退せらる。然るに其の春秋に富める肥大の好紳士は途に間もなく死去し、却て其の葬式には老人の澁澤氏が會葬せられしとぞ。「盜人の夜來るが如く」撒前五〇三)死は「夜半ばに」即ち意外の時に我儕を襲ふぞかし。

「この童女ども皆おきて其の燈を整へたるに」(七節)愚なる童女は其の燈を整ふるに際し始めて其の燈の熄んとする事と、之を補ふべき油の無き事とを悟れり。此は末日に於て人々自己の經歷を審判者に報告し、自己の信仰と行爲とを點檢し、而して神の前に於て譽むべき者なるや否やを檢査するを云ふ。我儕は常に目前の快樂を以て強て良心を欺きつゝあれども、死後審判の法庭に立つ時には、恰も照魔鏡に照さるゝが如く、熾烈なる光明は刺すが如く截るが如く人の心の最暗黑なる部分に迄も注入して、各人の眞相を暴露して微塵も掩ひ包むこと能はざるべければ、最早や誰も自ら欺くこと能はざる也。則ち我儕は被告として神の前に立ち、生前の記臆は檢事となりて證據を提供し、理性は判事となりて法津を解釋し、判斷は宣告文となりて其の決定を下して毫も猶豫せざる也。愚なる童女は困却の餘り其の友に向ひて云ひける「我儕の燈熄んとす願くは汝等の油を我儕に分與せよ」(八節)、神經痛や胃病や、其の他百般の疾病に罹れるもの、例令それが爲めに生命の危

殆に艱する事ありと雖も、是れ自ら作せる果を食ふ者に他ならざれば、茲に至りて涙を流し祈禱を捧げ號泣を發したるとも、自然の法則は頓着なく進行し、何ものを以てするも其の間を妨遮し得べからざる也。

「己が肉のために播くものは肉より敗壞ものを穫とる」(加六〇八)、「人の播くところのものは亦その穫ところと爲る」(同六〇七)、是れ自然の法則也、「賢きもの答て曰けるは我儕と汝等とに恐らくは足るまじ汝等賢者に往て己が爲めに買へ」(九節)、愚なる童女の願と之に對する賢き童女の答とは、富者の願と之に對するアブラハムの答との如く(路十八〇)、最も大切なる眞理を説明するもの也。是れ神の恩惠は熱禱と勤勉とを以て買ひ取るべきものにして、何等の勤勞なく無造作に之を獲んとするは、唯だ失望を招くのみなる事を敎ゆるもの也。中村榮助氏の談に滋賀縣の技師にして工學士なる某氏、一朝病を獲て醫師の診斷を請ひしに、醫仔細に檢視して餘命幾許も無き旨を答へしかば、彼は平生宗敎に無頓着なりし身なりと雖も、其の死の宣告を受けし以來は、頻りに未來の事のみ胸に浮びて轉た憂想に沈む。彼れ一日その友なる法學士森田某氏に告げて、「兩親は予の心を慰めんが爲めに、屢ば僧侶を招きて法話を聽かしむるも、學問の一端を嚙れる予には些少の効力なし、若し予にして基督敎を信仰せしならば、非常なる希望を懷きて死する事を得しならんに、然れども生命旦夕に迫れる今日に於ては如何とも致方なし」と、語り終りて天を仰ひで悵然たりしとぞ。我儕も斯る場合に於ては、此の賢き童女と共に、「汝等賢る者に往て買へ」との助言を與ふるの外なし、換言せば人間に依頼せずして恩惠の泉源たる神に往き、其の心中に恩惠の復活すべき道を求むべしと勸むるの外なき也。斯くて愚なる童女は過去の怠惰を償はんが爲めに他出せし間に「新郎來りけ

れば既に備へたる者」即ち其の器中に油を以て其の燈を一層明かならしめし者は「之と偕に婚姻に入りしかば門は閉ぢられたり」(十節)、門の閉ぢられたる事は是れ内に在る者の安然と喜樂とを保つと共に、外に在る者を防がんが爲めなり。予は過日赤穂の義士大石義雄の書簡を讀みしに、

前略二月前に供頭を以て申附け置きたる大手門右手櫓前の都合三本の松の眞中なるもの枝振長く延びて見苦しければ、至急手入すべき事、何故に今日まで延引致し候や、昨日登城の折、不圖目につき驚入候、右は早速手入致すべく、決して等閑に致し置き候ては不相成、此の旨乞度頼み入候、尚は奥書院の庭の掃除行屆き居らず、明朝矢作もの迄申出で、早速手入れ可致、此段乞度頼入候、右〇〇〇〇より申付くべきなれど至急の事故斯くは此方より申送り候

尚は今日暮方までに、人夫二人此方屋敷まで送り呉れらるべく是又急ぎ頼み入候

三月十九日朝

義雄

六助おぢ

尚々例の鉢手に入り候や、もし見付かり手元にあらば早速持參致すべく、此方留守なりとも苦しからず、奥にて貴樣の好物なる〇〇茶褒美に振舞申すべし

此は大石義雄が主君の變事を聞きし日の翌々日、御殿入りの庭造り六助翁に與へたる書簡なりと謂ふ。應に赤穂の城中は鼎の沸くが如く大紛擾を極むる中に、一人超然として此の餘裕を存する所、誠に稀世の大人物と謂ふべし。今此の悪なる五人の童女の比喩を讀み來らば、平日に於て修養と信仰とを怠りたる者の、一大事に處して周章狼狽、其爲

す所を知らざる痴態、宛然として吾人の眼前に現はるゝを覩る。「斯て後ち其の外の童女來りて云けるは主よ主よ開き給へ(十一節)、此等の童女は油を求めしも得ずして、其の缺乏を寛恕せられん事を請ふために歸來りしが如し。是れ死後に於て悔改すべきの機會なき事を示せる也。而して彼等が新郎を呼んで「主よ主よ」と再言したるは今此の門に入らん事を求むるの熱心を證するもの也。然れども主の答は「我れ誠に汝等に告ん我れ汝等を知ず(十三節)」との拒絶の宣言なりし也。要するに人は死後如何に後悔するも、如何に祈禱するも、如何に悲泣するも、一端閉されたる救の門は永久に開かるゝこと無かるべし。ジョナサン、エドワルド曰く「神が地獄の穴の上に不信者を置く事は、猶ほ人の蜘蛛若くは惡むべき昆虫を火の上に置くが如し、悔改めざる靈魂は家婦が烈々たる熱火の蓋を取りて、蠅を此の中に拂ひ落すが如くに、地獄へと拂ひ落すなり」と。予は未來審判の狀態を考ふる毎に、慄然として寒戰を禁ずること能はざる也、諸君の中には「ミカエル、アンゼロの傑作、「亡びたる靈魂」の圖を看しものあらん。此の圖は地獄に墮ちたる靈魂の狀態を巧に想像を以て描き出せるもの也。唯看る痩せ衰へたる一個の亡魂、全身を炎々たる猛火に包まれ、火焔の息を吹きながら喚き叫び、血の流るゝ巨眼を開きて怨恨げに、暗黑の巨淵を隔てゝ遥に天國の歡樂を眺むるの狀、一見して其の罪に責められ、苦み、悶へ、惱み、煩ふ態は斯くもあらんと思はれ、今更の如く恐怖の念に堪へざるを覺ゆ。基督は我儕をして斯る悲慘なる運命に陷らざらしめんが爲めに、我儕に敎へて言ひ給はく「然ば怠らずして守れ汝等その日その時を知らざれば也(十三節)」と。我儕は其の死の日を知らざれば、其の日の爲めに備ふる安全なる途は何れの日の爲めにも備ふるに在る也。西洋の諺に「義し

き死を遂げんと欲せば、義しく生活すべし」とあるが如く、我倘の日々刻刻の生活をして、宜しく未來審判の準備たらしむべし、否な我倘の日々刻々の生活は是れ最後の審判たる事を悟るべし。

第四章　兩銀

十四 また天國は或人の旅行せんとして其下僕を
よび所有を彼等に預るが如し 十五 各人の智慧に
從がひて或者には銀五千或者には二千或者には一千を
予へなき直に旅行せり 十六 五千の銀を
受し者は往て之を貿易し他に五千を得たり 十七 然る
に一千を受し者は往て地を掘その主の金を藏せり 十八 歷久て後その
計せしに 二十 五千の銀を受し者その他に五千の銀を携來りて主よ
千の銀を儲たりと曰ければ 二一 主かれに曰けるはあゝ善かつ忠なる僕
我なんぢに多ものを督らせん爾の主人の歡樂に入よ 二二 二千の銀を受し者きたりて主よ我に
二千の銀を預しが他に二千の銀を儲たりと曰ければ 二三 主かれに曰けるはあゝ善且忠なる僕ぞ
なんぢ寡なる事に忠なり我なんぢに多しのを督らせん爾の主人の歡樂に入よ 二四 また一千の
銀を受し者きたりて曰けるは主よ爾は嚴人にて播ざる處より穫ちさふる處より斂ることを
我は知る 二五 故に我懼てゆき主の一千の銀を地に藏し匿り今なんぢ爾の物を得たり 二六 その主
たへて曰けるは惡かつ惰れる僕ぞ爾わが播ざる處より刈り斂さふる處より斂ることを
然らば我が金を兌換舖に預置べきなり然ば我が歸たるとき本と利とを受るべし 二七 是故に彼の
一千の銀を取て十千の銀ある者に予へよ 二八 それ有る者は予られて倘あまりあり無有者はその有
る物をも奪る 三十 無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒すること有んと

第四章　兩銀

此の譬喩は十人の童女の譬喩と同じく、其の大目的は個人的の責任を
敎ゆる者にして、則ち基督は童女の譬喩を以て主に見ゆるの準備をな
すべき事を敎へ、此の譬喩を以て主に見ゆるに至る迄、各自預りたる金
子を以て主の爲めに働くべき事を訓へ給へる也。

(一)主人と僕　十四—十八

「亦天國は或人の旅行せんとして其僕を呼び所有を彼等に預るが如し」。
古昔東洋諸國には一家の主人が、其の財産を奴隷の手に托して、商賣又
は遊覽の爲めに、他國へ旅行するの風ありしが故に、基督は之を例に引
きて自己の昇天と再來とを説明し給ふ。「僕」とは我儕信者の事にして、
此は寧ろ奴隷と譯すべき語也。而して「所有」とは銀の事にして、猶太の

金額の名タアーレントは才能てふ文字と同一なれば、茲に所有又は銀何千と云へるは、財産、智恵、學識、健康の如き者を指して云へる也。「各人の力に依りて或者には銀五千、或者には二千、或者には一千を與へ置き直に旅行せり」。恰も雨は一樣に普く降れども之を受くる器具の大小に依りて其の水の分量に多少の差あるが如く神の賜物も我儕の力の多少に依りて或は五千、或は二千、或は一千と云ふが如く其の分量に多少の差ある也。然れども充分に滿さるゝ事に就ては更に甲乙なし。「五千の銀を受けし者は往て之を運轉し他に五千を得たり、二千を受けし者も亦他に二千を得たり」則ち愈々多く與へらるれば益々多く請求せらるゝ也。此等の二者は其の委托物に對して斯の如く忠實なれども第三者は然らず。「一千を受し者は往て地を堀り其の主の金を匿せり」。即ち前の二人は利益を得んが爲めに、托されたる金を運轉せしも、後の一人は之を運轉せずして空しく地中に埋む。予は茲に金子を以て人間の才能を形容せるを看て意味の深長なるを覺ゆ。實に我儕の才能を運轉すると地中に埋むるとは成敗の岐るゝ所と知べし。聞く佛蘭西の宰相ルーベーは未だ若かりし時マルセーユの一銀行に書記たりしが、「算術が出來ざれば」とて遂に免職せらる。然るに焉んぞ知らん彼は後大藏大臣又は巴里銀行の總裁として令名を馳せ、遂に佛國宰相の現職に上らんとは。心あく迄も勇健にして活氣に滿ち、勉勵と正直とを以て進まば、當年の愚物と呼ばれ、無能と罵られし者も、遂には人臣の位を極むるの榮位に登る事を得る也、翼くば我儕も托されたる五千、二千、一千の金を運轉して、十倍又は二十倍の利を得ん事を。

(二)善且つ忠なる僕　十九—二十三

「はゞ歷て後その僕たちの主歸りて彼等と會計せしに」。「はゞ歷て後」と

は主の再來の時、切言せば、我儕の死せし時を云ふ。其の時こそ我儕は主の法庭に立ち生前の行爲に就き主に報告せざる可らざる也。「五千の銀を受し者その外に五千の銀を持來りて主よ我に五千の銀を預けしが他に五千の銀を儲けたり、亦二千の銀を受し者來りて主よ我に二千の銀を預けしが外に二千の銀を儲けたり」。即ち彼等は托されたる銀の多少に從ひ、五に對して五、二に對して二を儲けし也。されば主人は忠僕を賞讃して「あゝ善且忠なる僕ぞ」と云ひ給ふ。五千を儲けし者と二千を儲けし者とに對する賞讃の辭の同一なるは、意味深長にして學ぶ所多し。我儕は常に神の爲めに大事業を爲さんと努むると雖も、焉んぞ知らん人々相互の間に存する智力才能働きの差は、洪大無邊なる神の眼中に置き給はざる所にして、假令才能甚だ乏しきも良く其の業務を重んずる者は、大事業を爲したる人と同一の賞讃を受けんとは、

諺に長者の千燈よりも貧者の一燈と云へるが如く、神の眼には此の比喩の五千を儲けたる者と、二千を儲けたる者との間には更に甲乙の差あるなし。「汝ぢ寡なる事に忠なり、我れ汝に多くのものを督らせん」。佛國巴里にライフイットと呼べる一青年ありき。彼れ銀行に職を求めんとして某銀行主に面會して其の希望を述べしも、生憎く空位なかりし爲め謝絶せられ、悄然として門を出る途端、庭に一本のピンの落ちたるを看て、直に之を拾ひ己が襟に差せしに、銀行主は之を看るや急ぎ呼び止め、彼に重き職を與へしにライフイットは忠實に其の職務を盡し、遂にライフイットと呼ぶ著明の銀行家となるに到る。斯の如く神は寡なる事に忠なる者には、其の報として多くのものを督らせ給ふ。「汝の主人の歡樂に入よ」。主人が斯く奴隷を招きて食卓を共にするは、今より彼を奴隷視せずして自由を與ふとの證據たる也。

(三)無益なる僕

「亦一千の銀を受けし者來りて曰けるは主は嚴き人にして播ざる所より苅り、散さいる所より斂むことを知る、故に我怖て往き主の一千の銀を地に匿し置り今汝ぢ汝の物を得たり」。此の僕が躊躇して最後に出し理由を解するは難からず。彼は如何に平氣なる顏を裝ふて主人の前に出しも心中甚だ安からざりし也。此の僕は不正なる番頭の如く主人の財產を費せし者に非ず(路十六〇一)。放蕩息子の如く其の分資を浪費せし者にも非ず(路十五〇十三)。無慈悲なる臣の如く千萬金の負債ありしにも非ず(太十八〇二四)。此の僕は此等の者とは全く別種の罪を犯せし者也。要するに基督は第三の僕を以て怠惰、卑怯、臆病にして活動せざる信者を警戒し給ふ也。予は此の比喩に人間の力量を形容するに金子の例を以てせるを看て意味の深長なるを覺ゆ。

我儕の品性にあれ、信仰にあれ、金錢の如く良く之を運用すれば驚くべき發達を極むる也。然るに我儕は此の無益なる僕の如く種々の口實の下に、托されたる一千若くは二千、五千の銀を土中に埋めつゝは非ざる乎。殊に此の比喩中委托物を忠實に取扱はざりし者が、五千若くは二千を受けし者の中に發見せられずして、特に一千を受けし者の中に發見せられたるは是れ亦大に味ふべき事也。此は我儕をして自己の怠惰を蔽はんが爲めに、「我が神の爲に盡し得べきものは僅少なれば、之を盡すも盡ざるも大なる影響を及ぼさず」なぜの口實を設くること無からしめん爲也。要するに各その托せられたる物の多少よりも、之を用ふるの忠不忠こそ神の審判の標準なれ。「その主答へて曰けるは惡且つ惰れる僕ぞ汝わが播ざる處より苅り、散さいる處より斂むることを知るか、然らば我が金を兌換師に預け置くべき也、然ば我が歸りたる

と。本と利とを受くべし」。特に「我が金」の一句に注意すべし。カーチギーの説に曰く「金は犯すべからざる天下の委托物なり」と。豈に啻に金のみならん乎。我儕の智慧も學識も時間も健康も皆凡て神よりの委托物なれば、之を人間の救と公益との爲に用ゐざる可らず。當時の利子は一割乃至三割以上と云へば、此の僕が托されたる金の利子は非常なる者と知る可し。故に彼は二十五節に「今汝ぢ汝の物を得たり」と公言せしと雖も、其の實は神の物を消費せる也。世に惡を行はざる事を以て誇れる者は、此の僕と共に神の譴責を受けざる可らず、何となれば神は我儕に善事を爲さしめんが爲めに、各その分に應じて力量を托し給へば也。

バックスター曰く「惡を爲さゞるは石に對する賞辭にして、人間に對してには非ず」と。此の金を銀行に預くる事に就ては、別に心靈上の意義ありや否や。

オルショーセンは巧に之を解釋して曰く、

「是れ獨立して神國の爲に働く事を躊躇する小膽の人は、己よりも更に堅固なる他人に從ひ、其の指圖を受けて其の預れる才能を教會の爲に活用すべしと勸ゆるに在り」と。予は思ふ自ら働くこと能はざる者と雖も祈禱を以て之を助くる事を得べく、或は常に集會に出席する事を以て之を助くる事を得べく、或は金錢を以て之を助くる事に金を銀行に預くべしとは「若し大事に於て主人の爲に働くこと能はざる者は、小事に於て忠義を盡し主人に損害なからしむべし」と云へる也。大事に於ても小事に於ても、主人の爲めに利を收めざりし怠惰なる僕は、一面には其の托されたる金を沒收せられ、他面には「外の幽暗に逐やれ」との宣告を與へらるゝに至る。「此故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に與よ」。斯く彼が銀を沒收せられしは、一は其の怠りしための罰にして、他は其の怠惰より生せし自然の結果なりと知るべし。

此の點に於ては自然界の事と心靈界の事と相互に符合す。例へば身體中の一肢を働かさゞれば漸々弱くなるが如く、信仰も之を用ゐざれば漸々衰ふるに至るべし。即ち「もたぬ者は其の持る物をも取らるべし」。之に反して其の一肢を屬みて働かす時は愈々強くなるが如く、信仰も亦之を用ふるに依て愈々增加すべし。諺にも「常に汲む井戸は涸るゝ事なし」とあるが如し。されば「もてる者は予へられて尙は餘あり」、斯くて「無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒する事あらん」。

第五章　慈悲深きサマリヤ人

○慈悲深きサマリヤ人

路加傳一〇章二五—三七

茲に一個の教法師あり起て彼を試み曰けるは師よ我なにか爲ば永生を受べき乎。二六イエス曰けるは律法に錄されしは何ぞ爾いかに讀か。二七答て曰けるは爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし。二八イエス曰けるは爾の答へ然り之を行はゞ生べし。二九彼みづから義を即なき者にせんとて、イエスに曰けるは我兄弟は誰なる乎。三〇イエス答て曰けるはある人エルサレムよりエリコに下るさき强盜に遇り强盜その衣服を剝取て之を打擲き瀕死になして去ぬ。三一斯る時に或祭司この路より下しが之を見て同じく過行り。三二或サマリアの人旅して此に來り之を見て憫み。三三近よりて油と酒を其傷に沃これを裹て己が驢馬にのせ旅邸に携往て介抱せり。三四次日いづるとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし增ば我かへりの時なんぢに償ふべしと曰へり。三五然ば此三人の うち誰か强盜に遇し者の隣なると爾思ふや。三六彼いひけるは其人を憐れみたる者なり。イエス曰けるは爾も往て其ごとくせよ

第五章　慈悲深きサマリヤ人

教法師とはモーゼの律法を研究し、之を人々に教ゆる者にして、恐らくは我邦往古の寺小屋の師匠と同じき者なりしならん。彼はイエスの評判を聞き、如何なる者なるかを驗さんと欲し、則ち起ちてイエスの許に往きて曰く「我れ何を爲さば永生を得べき乎」と。イエスの答辯次第にては鋭く之を說破し呉れんと待ち搆ゆるの風、宛然として眼に看るが如し。基督は相手の精神を看破せしが故に律法に錄されしは何ぞ汝如何に讀む乎」と、却て問を以て答に代へ給ひしかば、教法師は律法の極意とも云ふべき申命記六〇五、利未記十九〇十八の二句を引き來りて「汝心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる汝の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし」と答ふ。此の二句を連用して一句となし

たるは其の識見の凡ならざるを徴するに足らん。基督は相手の意氣揚々として自己の博學を街ふ態を冷かに眺め「汝の答然り之を行はゞ生くべし」と。教法師の虚を突かれしかば、彼は大に度を失し、苟も學者たる者が斯る簡易明白の質問を爲せしかとの人々の嘲笑を掩はんが爲め、更に「我隣とは誰なる乎」との難問を提出し、彼の質問の爾く簡易ならざる事を示さんと欲せしならん。蓋し當時の猶太人は「隣」の意を極めて狹く解釋し「汝の隣を愛み其敵を憾むべし」(太五〇四三)とあるが如く、隣を愛すとは唯その親友を愛するのみと思惟せしかば、基督は此の教法師を始め、多くの人々の蒙を啓かんが爲めに、左の比喩を語り給ひしなれ。而も次にベタニヤの物語あるに徴すれば、基督はエリコを發足してベタニヤへの途次、話中の「血の道」を辿り乍ら、盜賊の出沒せる森を眺め乍ら、往き交ふ祭司やレビ人や旅人を指示し乍ら、此の比喩を述べしならんと想はるれば、語る者も聞く者も更に一段の興味を覺えしならん。

(一)旅人と强盜　三十

「或人エルサレムよりエリコに下る時、强盜に遭へり」。エリコはヨルダンの谷間に在る一市街にして、一名棕櫚の街と呼ばるゝ程なれば、土地豊饒に水利に便に、棕櫚薔薇、鳳仙花、蜂蜜等の產物ありて、パリシテン中最も勝れたる所也。エルサレムの東北六里許の位置に在りて、地中海の海面よりも低きと凡そ六百尺なれば、斯くエリコに下るとは云ふなれ。猶太の歴史家ヨセフスは基督と同時代の人なりしが、彼は屢ばパリシテンに强盜多しと云ひ、又た聖ジエロームの言に依れば、エルサレムとエリコ間の道は流されし血に縁みて「赤路」又は「血路」と稱せられ、彼の時代には旅人保護の爲に此の山道に羅馬兵の屯所ありしと云ふ。

エリコ街道は斯る盗賊の難ある上に、ヨルダンの溪間に沿へる狹く石多き峽道ならば、多くの旅客は他の安然の路を迂回せしかば、往來極めて稀なりし故に「強盗その衣服を剝取りて之を打叩き瀕死になして去りぬ」。願ふに當時旅客は強盗の難を避けんが爲め、武裝せる從者を伴ふの風ありしも、此は猶太の商人にして金儲の事に夢中になりて、危險多き此の間道を急行せる間に斯る災難に罹りしか、或は途中旅舍の主人に道中が物騷なれば護衛の從者を雇へよと勸められしも我慢を張りて斯る最後を遂げしか、兎に角此の旅人は衣服も金も悉く奪ひ取られたる上に、半殺にせられて途上に棄てらるゝに到る。蓋し茲に謂ふ所の「血の道」とは人の一生「強盗」とは王陽明の謂ゆる心中の賊にして、肉體の慾、名譽の慾、金錢の慾などを謂ふ、彼の神を忘れて金儲に夢中になれるもの、又は血氣に馳せて我慢の振舞せる者の最

期は實に「血の道」にて血を流す事ぞかし。

三十一、三十二

(二)祭司及びレビ人

エリコは祭司又は宮司レビ人「斯る時に或る祭司この路より下れり」。の住居せる町にして、彼等は順番に當りて一定の時期その職務を行はん爲めエルサレムに往き、其の任務を果さば他の祭司と交替して歸途に就く。英語の聖書に依れば、茲には By Chance 即ち「偶然」或る祭司此の路を下れり」とある也。斯く解すれば意義の愈々深長なるを覺ゆ。「偶然」とあれば人間の眼より見る時は、眞に偶然の出來事の如く見ゆれども、此の事と彼の事との間には不思議なる絲ありて堅く之を繫げるを知らん。恰も機を織るに際し縱糸は相互に關係なきが如くなれども、横絲に依て關係あるものとせられ一の反物となるが如し。實に人間の生涯は縱糸の如くそれ〳〵相異なれども、神の攝理に依て萬人相互

に關係ある者とせらるゝぞ不思議なれ。彼の新島襄氏は脱走の際、函館より上海往の外國帆船に搭じ、上海に於て米國ボストン府の一艘の帆船を發見し、船長に懇請して乘込みしに、焉んぞ知らん此の帆船こそワイルド、ローバー號とて先生に十數年間巨萬の學資を與へ、先生をして日本に大事業を爲さしめたるボストンの紳商アルフユース、ハイデイー氏の所有船ならんとは、之れ豈に偶然の事ならん乎、神は屢ば偶然の事を以て我儕を試み給ふぞかし。我儕が愛を現はすべき場合は多く斯の如くして來る。我儕は今現にエリコの途上にあらざる乎。我儕の眼前には我儕の救助を要すべき幾多の人は横はり居らざる乎。小早川隆景の言に曰く「人たるものは不斷己れの門に磔の木ありと心得べし、何事も其の所作行跡、懈怠あらば此の磔の木に懸るべしと思ひ油斷すること勿れ」と。深く味ふべきの言と謂ふべし。さて半死の人は馬の足音を聞きて人や來つらんと眼を開きて之を窺へば、道は抑も什麼に此の馬上の人は此の地方に有名なる祭司ならんとは、此の祭司こそ平生慈悲仁愛の教を說き居る方なれば、斯る際には誰よりも先づ骨を折りて助け呉るゝならんと思ふ間もなく「祭司は之を見過しにして往けり」。馬上の祭司は彼を一見せしのみにて鞭聲高く馬を馳せ飛ばせ、エリコを指してぞ歸りける。祭司は思へらく斯る危險の所なれば己れも亦同じ危險に逢ふの虞あらん。或は旅人の傷重ければ到底一命を助くるの望なからん。或は神殿の職務多忙なれば斯る俗事に關係するの義務なからん。或は後に來れるレビ人こそ吾よりも此の重傷者を助くるに適當ならん。其他種々の口實を設け强て自ら良心を欺き、自ら罪なき者となせしならん。蓋し此の祭司こそは神の攝理の中に在る愛を表はすの機會を失へるものなれ。半死の旅人の憤怒

は如何に、其の失望は如何に。併し乍ら間もなく人の足音彼方に聞ゆ。旅人は今度こそはと心の中に神の助を念じ乍ら彼方を眺めやれば、其の人こそは宮司のレビ人ならんとは。レビ人は其の位こそ祭司に劣れ、常にエルサレム宮殿の世話役として人民の尊敬を博せる人也。「又レビの人も此に至り進み見て」。彼は祭司よりも更に無情の人にして、わざ〳〵旅人の傍近く進み寄りて、つく〴〵眺め乍ら「同じく過ぎ行けり」。レビ人も思へらく此の旅人を助くる事が我僧の義務ならば祭司必らず怠らざりしならん。或は我には祭司が怖れて爲さゝる事を爲すの義務あらざるべし。或は祭司が爲さゝりし事を吾れ代りて之を爲さば、祭司を以て慈善と愛情なき人となす事なれば、是れ長者に對して無禮の業ならん。其他種々の遁辭を造りて同國人を看棄てける。要するに基督は此の一段に於ては、道德を離れたる宗教の如何に無用なるかを痛言せる也。基督の教訓を約言せば信仰とは善行にして、基督教徒とは善人たる事也。尙は馬太傳二十五章三十一節乃至四十六節を讀まば蓋し思半ばに過ぎん。

(三)良きサマリヤ人　三十三—三十五

半死の旅人は彼の信心の聞高き宮司にも、別けて高德の譽高き祭司にさへも、彼の如く情なく見棄てられしが故に、今は失望落膽の淵に沈み果て、救助を求むるの勇氣もなく〳〵、看るとは無しに彼方を眺めやれば「或るサマリヤ人旅して此に來り」。三人目に來りしは平生サマリヤの狗と賤視せる隣國の旅商人也。元來ユダヤ人はサマリヤ人をクタ人と呼び、會堂にて公に彼等を咀ひ、彼等が救はれざる事を祈り、若し彼等を厚遇する者は子孫に至る迄も罰を招くと云ひ、最も嫌ひし事はクタ人を看ざる事なりと云ひし位ならば、此の半死の旅人は首を左右

にしてサマリヤ人の好意を拒絶せしならん。然れども、サマリヤ人は「之を看て憫み」彼は同情に堪へず直に「油と酒を其の傷に沃ぎ、これを裹み」。流石は醫者路加の筆とて描寫精細を極む。油は其の疼痛を止め酒は其の傷を癒すの力あるが故に、古來東洋諸國の醫者は之を以て傷症に對する良藥と認め、殊に熱帶國のユダヤに於ては、今日我儕が氣附藥としてウィスキーや賣丹を携帶せるが如く油と酒とを携帶せしとぞ。蓋し酒と油は當時高價の者にて「之を裹み」とあるは自己の衣服を裂きて傷口を繃帶せしならん。斯くてサマリヤ人は多くの時間を費して彼を助け、絶えなんとする息を呼び返し、彼を己が驢馬に乘せ、己は徒歩して旅舍に連れ往きける。今倘はバクリムとてエリコとエルサレムの途中に、旅舍の趾ありて當年を忍ばしむるとぞ。彼は終夜肉身の兄弟も及ばざる親切なる介抱を盡し、而も出立の時には「銀二枚」を旅舍の

主人に渡し「此の人を介抱せよ費もし增ば我れ返りの時に汝に償ふべし」と云へり。銀二枚とは僅少の額と思はるれども、當時の場合を考ふれば決して然らず。銀二枚は當時の職人の二日分の賃銀たりと云へば、少なくとも數日の費用を充すに十分なりしなるべし。而して此のサマリヤ人は恐らくは用事の爲め一二日間エルサレムに旅し再び此處に來りしならん。聞く二宮尊德は小田原侯の大夫服部十郎兵衛の廢家を興さんが爲め、新婚の妻を諭して別居すること五年、其間は服部家の奴僕の如くなりて一家の仕方に任じ、服部氏出れば若黨となりて之に從ひ、毎夜家を治め國を治むるの道を說て以て服部氏に敎へ、首尾よく五年の間に其の目的を達し、服部氏が與ふる百金の金をも辭して受けざりしとぞ。此の他人の爲めに五年間の無駄働をなすの精神は實に世に稀なる事と謂ふべし。同情とは人の爲めに苦むの義也。英

語のシムパシイ(同情)の語源は希臘語にして「シン」(共に)「パソス」(苦ひ)と云ふ語より成立せる也。我儕は此のサマリヤ人の行屆ける愛の實行に倣はざる可らず。此の人生はエリコの血の路也。エリコ途上の半死半生の負傷者は我儕の周圍に滿つ。我儕は祭司たる乎、レビ人たる乎、又は良きサマリヤ人たる乎。靜に汝の隣人は誰なりやと考ふ可し。蓋し茲に謂ふ所の半死半生の旅人とは、罪の爲めに衣を剝取られ、全身に甚しき傷を受け、血潮流れて死に瀕せる我儕の靈魂の狀態に喩ふ。而してサマリヤ人とは基督の事にして、基督は流血淋漓なる我儕の靈魂を憐み、油を傷に注し酒を以て之を清め、則ち己を人の心の裏に注ぎ、信仰に由て凡ての人の心を清め給ふ。蓋し此の比喩は「隣」とは誰なる乎」の問に應ふと共に、間接に「神とは何ぞ乎」との問に答ふ、曰く「神は愛也」。

第六章　放蕩息子と其兄

○放蕩息子と其兄

十一また曰けるは或人子二人あり　十二その季子父に曰けるは父よ我得べき業を我に分予よ父その産を彼等に分たれば　十三幾日も過ざるに季子その産を盡く集て遠國へ旅行せしが放蕩にして其分資を皆そこにて耗せり　十四盡く耗しゝとき大なる饑饉その地に有て彼ともしく爲はじめければ　十五往て其地の一民に身を投たり其人豕を牧ために彼を野に遣せり　十六かれ豕の食する所の豆莢をも己が腹を栗さんと欲ふほどなれど何をも彼に予ふる人なし　十七自ら省悟て曰けるは我父の所には食物あまれる備人の許多か有に我は飢て死んとす　十八起て我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれば　十九爾の子と稱るに足ざる者なり爾の備人の一人の如く我を爲たまへと　二十即ち起て其父に往りけるに其父かれを見て憫み馳往て其頸を抱て接吻しぬ　二一子父に曰けるは父よ我天と爾の前に罪を犯たれば爾の子と稱るに足ざる也　二二父その僕等に曰けるは至も美服を携來りて之に衣せ其指に環をはめ其足に履を穿せよ　二三また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん　二四是わが子死て復生うしなひて復得たれば也て彼等と共に樂み始む　二五その兄田に在しが歸て家に近き樂と舞の音を聞　二六その僕の一人を召て是何事ぞやと問るに　二七僕曰けるは爾の弟歸りたり慈なく彼を得たりしに因て爾が父肥たる犢を宰たるなり　二八兄いかりて入ず是故に其父いでて彼に勸しかば　二九父に答て曰けるは我多年なんちに事へて未だ爾の命に背ず然ども我友と樂む爲に肥たる此なんちが子かへれば之が爲に肥たる犢を宰れり　三一父が然に妓の爲に爾の業を耗したる此なんちが子かへれば之が爲に肥たる犢を宰れり　三一父が　三二爾の弟死て復生うれに曰けるは子よ爾は常に我と共に在まわれ我所有は皆なんちの屬なり　三二爾の弟死て復生うしなひて復得たるが故に我儕喜て樂むは當然の事なり

第六章　放蕩息子と其兄

此の譬喩は如何なる時、如何なる目的を以て語られしやと云ふに、本章の一節二節に依れば、パリサイの徒が基督の稅吏又は罪ある者と交はれるを批難せし時に語られしなれば、其の目的は天父の愛の廣大なる事を示さんとせる也。此の譬喩は「福音の福音」又は「惡の章」と呼ばれ、之れを讀む者をして天父の愛の洪大なるに感泣し、如何なる罪人も其の罪を悔改し、遂に起て吾が父に往かんと云ふに到らしむ。此の譬喩の第一部は十一節乃至二十四節にして其の主意は放蕩息子、第二部は二十五節乃至三十二節にして、其の主意は放蕩息子の兄の記事なりとす。左に順序を逐ふて之を研究せん。

(一)放蕩息子

(ひ)罪　十二、十三

「その季子父に曰けるは父よ我得べき業を我に分け予よ」。父の存命中に其の財産を子供等に分配する事は、東洋諸國の習慣なれども猶太人中には斯る習慣なし。唯だ父の死後に弟は兄の手額を遺産として分配せらるゝの習慣ありしのみなれば、此は斯く解すべし、曰く「父上の死後遂に我が所有に歸すべき財産を今我に分予よ」と。此の一語に依て觀るも季子の不孝にして思慮なく、我儘にして放埒なる事を知るべし。彼の心には既に父を思ふの念なき也。「父その財産を彼等に分ちたれば」其の子の氣質を熟知せる父が直に其の要求を容れしは不思議に看ゆれども、是れ父の深意の存する所也。則ち彼の心中既に父の家を離れたれば、強て引き留むるは益なく、寧ろ辛苦を其むるに依て其の願の愚なることを悟らしむるは更に善しと思ひしが故也。神の人を教育し給ふ途は常に斯の如し。「幾日も過ざるに季子その產を盡く集めて遠國へ旅行せしが」其の財產を金銀寶玉の如き運搬し易き物に交換して、浮世の快樂を貪らんとて神に背を向けて、遠國即ち神の在さゝる所に旅行せり。「放蕩にして其の分資を皆そこにて耗せり」「三十節に妓の爲めに」とあるを看れば、彼が如何なる放埒を盡して其の金を撒き散せしかを想像するに難からざる也。此の一段に於て學ぶべきは罪とは何ぞやとの問題也。基督の謂ゆる罪は人と人との關係に非ずして、神と人との關係に就て謂ふ、是れ基督教の謂ふ罪と法律の謂ふ罪との異なる所以也。則ち此の放蕩息子が父を離れて遠く去りしは是れ罪にして、其の妓に戯れて不義の快樂を貪りしは、彼が父を離れて遠く去りし事の結果に過ぎざるなり。例へば混々として盡きざる泉を有する池水は涸るゝことなく腐る事なきも水溜の水は稍やもすれば涸れ腐るが如く、日光を離れたる草木の繁茂せざるが

如く、水を離れたる魚の腐れ易きが如く、若し我儕が生命の源泉たる神と共に在る時は罪を犯すことあらざるも、一度神と離るゝ時は忽ち罪を犯すに到る。實に罪は神を離れし結果也。我儕は世人の言ふ如く窃み、人殺、姦淫の罪を犯せしこと無るべし。然れども此の最も恐るべき罪、則ち神を離るゝの罪は犯さゞる乎。我の卑穢なる、傲慢なる、不愛相なる、色欲の奴たるは、皆悉く神を離れしが故也。故に我にして神に歸する事を得ば我は善人となり得べく罪に勝つことを得べし。

(ろ)罪の結果　十四―十六　放蕩息子の歩める途の遂に達すべき所は窮乏と零落たる也。彼は己が一身を支ふべき途も無き時に、泣面に蜂の譬に洩れず其の地に大なる饑饉起れりと云ふ。「盡く耗せし時大なる饑饉その地に在りて彼乏しく爲りはじめければ」、蕩兒窮すれば父の家を懐ふ、彼は乏しく爲り始めし時に故郷に歸れとの召喚を受けしならん。神は屢ば疾病を以て不幸を以て貧苦を以て父の家に歸れと我儕を招き給ふぞかし。「往て其地の一民に身を寄せたり、原語に依れば「投たり」即ち其の人に「絆り付き」たる也。然るに「其人家を牧ために彼を野に遣せり」、猶太にては豕を牧ふことを禁ずるが故に、彼が身を托せし主人は異邦人にして、此は「惡魔」に例ふべし。富貴の家に生れたる彼は、異邦人に身を寄せしも其の憐恤を得ること覺束なく、此の新主人は一飯を乞ひし雇人を顧るとなく、猶太人の眼には乞食するよりも賤しき業と看做されたる豕を牧はんが爲めに彼を野に遣しける。實に神を離れたる者の運命は野也、豕を牧ふこと也。諸君は神を知らざる人の心中に於て、又は神を離れたる人の家庭に於て、屢ば此の活畫圖を觀るならん。「彼れ豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふ、はべなれども何をも彼に予る人なし」、靈魂の要求を滿足せしめ得

る者は唯だ神あるのみにして、神の爲めに造られし人心を滿足せしめ得る者は神の外他に誰もあること莫し。海魚は海岸に來らば頻に煩悶す。其の煩悶する所以は何ぞ、曰く之れ其の水を失へるが爲めに外ならざる也。若し掬して以て之を水中に投せば、亦た見苦しき煩悶を爲すこと無く、己の欲する所に任せて靜に樂しげに游泳すべし。此の放蕩息子は海岸の魚の如く、神を離れて罪惡の淵に迷へるが故に、零落と窮乏とに迫られて遂に亡びんとはするなれ。若し彼をして再び神の愛に歸らしめ、神の深き海に游泳せしめなば、萬事茲に於てか滿足ならざること無けん。若し諸君の中に罪に惱める者、不幸に苦める者あらば、今直に神に歸れ、然らば萬事宜しきを得ん。之に反して神より離れんか其の前途は唯だ暗黑と失望と死ある而已。ラバテル曰く「萬人の取るべき途は唯だ二のみ、曰く神、曰く不幸これ」と宜なるかな言乎。

(は)悔改　十七—二十

我儕は是れ迄は放蕩息子が漸々神に遠ざかりて、悲境より悲境に流浪して遂に其の極所に達せし迄の行程を一歩一歩辿り來りしが、是よりは稍や喜ばしき方面に轉じ、彼が悔改の發端より再び子たる權利を得る迄の行程を辿るべし。「自ら省悟て曰けるは我父の所には食物あまれる傭人の許多が有るに我は飢て死んとす」、彼れ神を棄つるも、遠國に在し時も、家の豆莢の中に在し時も、神は更に彼を棄て給はざりし。彼の上に打ち來りし禍は、彼の罪に對する怒の證なれども、亦た一方より看れば是れ罪人に對する神の愛の印たる也。神は彼に其の罪を惡ましめんが爲に、彼に罪の苦さを味はせ給ふ、彼は斯る懲治に遭はざれば恐らくは神の招を聞くも之に從はざるべし。彼は愛の懲治に依りて「己に歸りたり」。茲に「省悟」と譯せられたる文字は、二十節の「其の父に往けり」と譯せられたる文字と同一の文字用ゐら

る、則ち己に歸るとは神に往くと同一の義にして、我儕眞に自己を認むる時は之と同時に神を認め、又た神を認むる時は從つて自己を認むることを得る也。オーガスチン曰く「神は己の爲めに人を造れり、故に人は神に往かざれば安んずること能はず」と。彼れ自己に歸りて己を知る時、吾が世の獣樂畢竟豆莢たることを知るべし。「起て我が父に往かん」蓋し彼が父に歸るの動機は何ぞやと問ふに、「我が父の所には食物あまれる傭人の許多が在るに我は飢て死んとす」則ち彼が悔改の動機は一片のパンを得んとするに過ぎず。我は飢て死んとすれば吾が父に往くと云ふ。何ぞ其の動機の卑陋なる斯くも甚しき乎。然れども慈愛の父は深く其の動機の如何を顧ざる也。「父よ我れ天と汝の前に罪を犯したれば」「此は天に在す我父なる汝の前に罪を犯したれば」との意也。我は惡に依りて自己を傷け又た隣人を害することあるも、厳しく

云へば是れ唯だ神に向ひて罪を犯せる也。「汝の子と稱るに足ざる者なり、汝の傭人の一人の如く我を爲し給へ」、我儕神に護られんと欲せば常に此の謙遜の心を保たざる可らず。「即ち起て其父に往り」、彼は猶躊躇せず時を移すことなく、急ぎて既に決せし所を直に行へり。彼は罪を荷ひ恥を負ふて悄然として故郷に歸る。然るに「尚遠く有しに其父彼を見たり」、其の父が他人に先ちて彼を看しは偶然に非ず。彼は常に希望を懷き久しく其の子の歸るを待ち居たりしに相違なし。「彼は憐み趨り往き其頸を抱きて接吻しぬ」、彼は可憐なる流浪者が我が家の門に來着するまで待つに堪へざりけん。急ぎ出で自ら彼を迎へたり。彼は歸來せる落兒に汝は家僕の群に入りて一年若くは二年を待て、吾れ汝の心を深く驗して然る後ち予が子とせんとは冒はざる也。「憐み」「走り往き」「其の頸を抱き」「接吻しぬ」「親心躍然として踊るが如し。「接

吻は東洋の習慣に依れば唯だ愛情の濃なる證據なるのみならず、又た和睦を表するの證據たる也。

(に)赦　二十一―二十四　「父よ我天と汝の前に罪を犯したれば汝の子と稱るに足らざる也」神は人の罪を赦し給ふも、人は己が罪を忘るべからざる也。而して彼が斯く自白せしは和親の接吻を受けし前に非ずして後なることに注意すべし。何となれば一層深く神の愛を知り且つ之を味ふ時は、一層深く其の愛に背きしことを悲むべければ也。蓋し十九節と二十一節とを比較せば更に神の愛の深きを知るべし。即ち父は其の子の言を半ばにて遮り止め、遂に後半の言を云ひ出すべき機會を與へざらしめし也。「父その僕等に曰けるは(急き―改正譯には斯く訂正す)至も美服を携來りて之に衣せ其の指に環を嵌め其の足に履を穿せよ」茲に「美服」と譯したる原語は以前の衣服とも譯すことを

得べし、即ち彼が子たりし時、父の家にて以前に着用せし衣服の意也。顧ふに父は屢ば蕩兒が前に衣たる衣服を出しては、思を遠遊の愛兒の上に輸せしならん。而して「環」は實印附の指環の事にして、之を交付するは財產又は家政の司配權を讓る事と看做すべく、次に當時奴隷は靴を穿たざりしが故に「靴」を穿たしむるは主人たるの名譽の地位を與ふる事と看做すべし。「また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん」肥たる犢とは原語に依れば麥にて飼養せる犢」とて特別に注意して飼養せる意にして「宰」とは神恩を感謝するの意を含めるが故に、此の宴會は單に一家の祝宴とのみ解すべからざるは勿論と云ふべし。「是わが子死て復生うしなひて復得たれば」なりとて彼等と共に樂み始ひ」父は僕婢等をも集めて斯く蕩兒の歸宅を歡び迎へける。「われ彼等の不義を恤み其罪と惡をまた意に記ざれば也」(希八〇十二)之を要するに我

儕は自ら罪の汚を除くに非ざれば神の前に出づること能はざるに非ず、父の愛に其の身を托さば父の愛は我儕を罪より潔め、舊き習慣と性癖とより救ひ給ふは勿論、何等の條件なくして容易に犯罪以前の名譽の地位を與へ給ふぞかし。

予想ふに此の譬喩は神の愛を人情に寓せるの結果として、父たる神が罪人に對する態度を少しく狹く限りたるの感なき能はざる也。則ち放蕩息子の父は家に在りて蕩兒の歸り來るを俟つのみにして、彼を愛し彼の身の上を案ずるの餘に、杖を力に蕩兒を求め歩くの情を寫さゞるの嫌あるを覺ゆ。「それ人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり」(路十九〇十)。罪人たる我儕を救はん爲に、天の御位を棄て穢しき人間の形を取りて、我儕の中に降りし所の神は、彼の歌に「かね大鼓、聲のかれたが親さうな」と詠へる如く、夜も晝も鐘と大鼓とにて愛する迷子を尋ねて歩き給ふ。「我が母われを捨つるともエホバわれを迎へ給はん」(詩二十七〇十)、「婦その乳兒をわすれて己が腹の子を憐まざることあらんや、假令彼等忘るゝことありとも我は汝等を忘るゝことなし」(賽四九〇十五)、されば苟くも人たるもの一日も早く己が罪を悔悟して、天父の慈愛の膝下に歸來せざる可けん乎。

(二)放蕩息子の兄　二十五—三十二

基督が放蕩放埒なる弟に配するに、勤勉力行なる兄を以てせるは、罪に二種の別ある事、及び其の二者の孰が重きかを論じ、且つ之に對する神の愛の如何に廣大なるかを叙せんが爲也。弟の罪は肉慾的衝動より起る食慾色慾などの罪を代表し、兄の罪は利己的衝動より起る嫉妬傲慢などの罪を代表せる也。「その兄田に在りしが歸りて家に近き樂と舞の音を聞き」、弟が遠國に往き放蕩の爲めに其の資産を消耗せし間

も兄は家に在りて其の父の畑を耕しける。彼は今日も平常の如く其の日の勞働を終へて家に歸りしに、我家にては舞と樂の音高く聞ゆ。彼は其の常ならざる光景を訝り乍ら、「其の僕の一人を呼びて是れ何事ぞ乎」と詰りしが如し。「どやと問へり」。彼は此の宴を非難して「是れ何事ぞ乎」と詰りしが如し。此の一事以て彼の局量の狹隘なるを看るに足る。「僕曰けるは汝の弟歸りて恙なく彼を得たりしに因て汝が父肥たる犢を宰たるも」豫て父が放蕩なる弟に對して其の愛に溺れ居る事を慨せる兄なれば、斯くと聞きては怒氣心頭に發して「兄怒りて入ず」原語にては「入ること」を欲せず」との意也。遂に「是故に其父いでて彼に勸めしかば」父の勸めに從はゝこそ果は父が己と弟とに對して異なる待遇を爲し、而も不品行なる弟に恩惠を施せし事を咎めて曰けるは「我れ多年汝に事へて未だ汝の命に背かず、されども我が友と樂む爲に山羊をも予へし事なし」。

兄が此時「父」なる語を用ゐずして「汝」と云ひしは注意すべき點也。斯くて彼は邪推を以て父が己に對する待遇と弟に對する待遇とを比較して曰けるは「然るに妓の爲に汝の財産を耗したる此の汝の子(我が弟と云はず)來らば(歸れりと云はず)之が爲に肥たる犢を宰れり」。若し夫れ其の弟に美服を衣せ、靴を穿かせ、而も家宰權の印たる指環をはめさせし事を知りたらんには、其の嫉妬怨恨の情は果して如何。父は斯る無情冷酷なる兄をも叱責することなく、同は温顏を以て曰く「子よ(娘も親愛の言なれば寧ろ小子よと譯さば一層原語の意に近し)汝は常に我と共に在り又た我所有は皆なんぢの屬也、汝の弟(我が子と云はず)死て復生うしなひて復得たるが故に我儕喜び樂むは當然の事也」。若し我儕の中に他人の榮華を看て之を嫉み、自己の薄命を以て之を呟く者あらば、神は「我所有は皆なんぢの屬也」と答へ給はん、何となれば神の惠は無

盡藏なれば、之を甲に與ふるも敢て乙の分を減ずる譯には非ざれば也。顧ふに世に下平不滿を訴ふる者少なからざるは、是れ神の不公平なるが爲めに非ずして、畢竟この兄の如く其の人の心狹きが故に、自ら不平不滿を招く者なりと知るべし。

之を要するに兄は表面に於ては正義、正直、躬行、献身、熱信の美德を具備せるが如きも、其の裏面に於ては狹量、憤怒、傲慢、嫉妬、冷酷の惡性を胚胎せる也。

グランドストン曰く「人生の經驗として深く予の心に浸染せる事は、宗教を以て道德を害せざるやう注意すべしとの事なり。毎日人は種々の方法に於て此の誘惑に懸りつゝあるぞかし」と。是を心理學上の研究に徵するも、正義は人をして狹量ならしめ、正直は人をして憤怒ならしめ、躬行は人をして傲慢ならしめ、献身は人をして嫉妬ならしめ、熱信は人をして冷酷ならしめ易し。而して兄の罪と弟の罪とを比較せば、其の原因より云ふも結果より考ふるも、其罪の大小輕重決して同日の論に非ざる也。何となれば弟の罪は肉體的衝動に依て起され、其の害は自己一身に留まれども、兄の罪は精神的衝動に依て起され、其害は自己と共に他人にも及べば也。而して弟の罪は教育修養の功に依て制する事を得んも、兄の罪は宗教の力に依るに非ざらば改むること能はざる可し。是れ比喩中の弟は悔改に導く事を得しも、其の兄は遂に回復すること能はざる墮落に沈める所以ならず乎。而して此の兄はパリサイ人、弟は稅吏罪人を指し、間接には兄は基督教徒、弟は未信者に比せしものなる事を知らば、其の意味の更に剴切なるを覺ゆるならん。蓋し本比喩の目的は神の愛にあれば、此の二種の罪に對する神の處作の如何を考へ、以て神の愛の絶大にして如何なる者に對しても、其の無限の愛を傾け給ふ事を學ぶべし。

第七章　パリサイ人と稅吏

○パリサイ人と税吏

路加傳十八章九―十四

九又みづから義と恃ひ人を輕むる或人にイエス此譬を語れり
十二人祈んとて殿に登りしが其一人はパリサイの人一人は税
吏なりき十一パリサイの人たちて自ら如此いのれり神よ我は他
の人の如く強欲、不義、姦淫せず亦この税吏の如くにも有ざるを
謝す十二われ七日間に二次斷食し又すべて獲ものゝ十分の一を
献たり十三税吏は遠に立て天をも仰ぎ見ず其胸を搥て神よ罪人
なる我を憐み給へと曰り十四我なんぢらに告ん此人は彼人よりは
義と爲れて家に歸たり夫すべて自己を高る者は卑られ自己を
卑す者は高らるべし

第七章　パリサイ人と税吏

此の譬喩を充分に了解せんと欲せば、先づ最初この譚を聞きたる人々の感想如何を窺はざる可らず。パリサイ人は我邦の神主の如く庄屋の如く、敬神家又は道德家を以て呼ばれ、大に世間の尊敬を博せる人々なれども、之に反して税吏は敵國ロマ政府に雇はれて税金の取立を職業とせるが故に、我邦の穢多の如く非人の如く、不信心又は不道德を以て目せられ、世間よりは犬猫の如く忌嫌はれたる僧輩也。然るに焉んぞ知らん、主は此のパリサイ人の背後に悄々として佇立せる税吏が天をも仰ぎ得ずに、纔かに「神よ罪人なる我を憐み給へ」と叫べるを指さして「税吏はパリサイ人よりも義とせられて家に歸りたり」と稱讃し、而してパリサイ人の義しき事に就ては何の賞辭をも發し給はざらんとは。

蓋し其の品性に於て其の信仰に於てパリサイ人に比して毫も優る所なき一稅吏を斯くまで稱讃し、彼をパリサイ人の上坐に置きしは果して當然と云ふべきや否や、乞ふ少しく之を論せん。

(一)パリサイ人の祈　十一—十二

「パリサイの人たち自ら如此いのれり」、宮殿に於て祈る時に立ちて祈るは當時の風習にして、十三節に依れば稅吏も立ちて祈れりと看ゆ。然れども原文に依れば少しく差異あるが如し。此の節の「起ちて」と云ふ語を仔細に吟味すれば、主は殊更に語聲を强めて此の語を用ゐ給ひたるが故に下の如く解すべし。則ちパリサイ人は衆人をして自己の敬虔なる事を認識せしめんが爲に、稠人廣座の前に起ち傲然として天を仰ぎ見、宮殿の偶々まで聳かん計の大聲を發して祈を捧ぐ、故に寧ろ本節は「パリサイの人獨り立ちて——人を離れて——斯く祈れり」と譯さば更に適切ならん。斯くて彼は鹿爪らしく祈りて曰く「神よ我は他人の如く强索、不義、姦淫せず」と。而して彼は端なく稅吏が犯せる罪を悔恨して苦慮煩悶せる狀を眺め、彼の如く其の胸を拍ち、且つ恥ぢて地に面するの必要なき事を神に感謝して曰く「亦此の稅吏の如くに非ざるを謝す」と。彼は此の短き祈の中に「我」てふ個人的名詞を用ゆること五回、且つ其の祈は高慢と自負との精神を以て充さる。蓋し彼は神に感謝する事を名として、その實は自己を稱揚すると共に他人を輕蔑し侮辱せる也。聞く重野成齋と呼べる儒者、或時中村敬宇を詰りて曰く、「基督教にては罪の悔改め、又は救てふ事を何よりも重ずるが如し、斯る教は不品行不道德なる人々には、如何にも適當なる事ならんも、貴君の如き道德堅固の君子にして、亦此の基督教に歸依し、罪の悔改め若くは救てふ事を口にせらるゝは何事ぞ」と。敬宇先生は儒者の思想の輕浮

なるに一驚を喫し、唯だ一言の返答も無く微笑せられしのみなりとぞ。此の譬喩のパリサイ人や重野成齋などの自稱道德家は、恰も肺病患者が其の內部に死因の存する有るも之を知らずして、自ら强健なりと自負せるが如く、自己には强索、不義、姦淫の罪よりも、尙ほ惡むべき罪たる神と人とを愛するの愛心なき事を知らざる也。「くらがりで影ぼうしめを見失ひ、火を燈してぞ見つけたりける」罪は其の結果として良心を痲痺せしむ。「名將言行錄」德川賴宣の條に下の如き逸事を載す。

熊野山中に親を殺せる者あり、吏之を捕へて糺問すれば恐れ憚る氣色も無く、我れ他人の親を殺せしにもあらば御咎めあるべき事也、我が殺せしは我が親也、常に我儘のみを言ひ、家內の者も困り果て、某が申すことをも用ゐざるが故に殺せる也、されば我の誤にあらずと言ふ。賴宣此の由を聞き、偖も〳〵熊野山中邊鄙とは言ひながら、我が城下を離るゝと遠きに非ず、禽獸すら其の孝は知れり、況や下賤たりとも人に於てをや、禽獸に劣りたる行こそ彼が過ちに非ず、我が政道の屆かざる不德のなす業なれとて涙を流し、然るにても斯る愚者を其儘罪すべきに非ず、其の孝の骨きを驗し聽かせてと。其頃南紀の鴻儒李梅溪と云へるに申し付け、日々獄に行て孝經を講じ聞かせけり、三年を經て後ち其者始めて孝道の重きを知り、夢の醒めたる如くに言ひ出でけるに、さて〳〵今まで斯る親の有難きことを知らずして實に勿體なき事をし、上にも御苦勞を懸け奉ることは言はん方なし、斯く道を存ずる上は須臾も天道の光を受けんこと恐ろしく、あはれ早く、御處刑仰せ付けられ候へと、殿を始め役人ども不便とは思ひながら政道なりとて法の如く之を罪なひぬ。

能く考へて見れば人間誰か此の熊野の親殺しに類せざる者あらん。我儕は神に對して恐ろしき罪を犯せども、恬として恥ぢる事を知らず、此の譬喩中のパリサイ人と共に「神よ我は他の人の如く强索不義姦淫せず亦此の税吏の如くにも有ざるを謝す」と誇る。彼の熊野山中の親殺しが我元來他人の親を殺せるに非ず、己が親を殺せるのみとて飽くまで抗辯せし時、役人は呆れ果て本人は平然たるに拘はらず、國主たる南龍公は涙を流せりとあるが如く、我儕が罪惡を重ね乍ら忌み憚る所なきに際し、之が爲めに斷腸の思をなして、我儕の知らざる涙を流す者は神なりと知るべし。要するに我儕が神の恩惠を適當に認むる時に、深く自己を卑くし其の恩惠に對して忠ならざる事と、其の佑助に依て爲す事を得たりし善を多く爲さゝりし事を常に懺悔するに至らん。

「我れ七日間に二回斷食し」

モーセの律法に依れば斷食の日は一年に唯だ一日のみなれども、パリサイ人等は一週に二回即ち月曜と金曜とに斷食し、亦その凡て得る物の十分の一を献たり、律法に依れば單に收穫の十分の一を納むべきなれども、彼等は此の外凡て彼の穫し物は些少の物に至るまで其の十分の一を献げつゝ、彼は斯く行ふに依りて神と雖も自分に恩あるが如く思惟せる也。律法の主意に依れば斷食すべき事は心の貧しく且つ乏しきことを悟らしめ、十分の一を納むべき事は凡ての所有物は皆神の物なるが故に神の爲めに用ふべき事を想起さしむるに在るも、彼は此の律法を濫用して己が高慢と自負を現はすための具となせる也。旅順の堅砦遂に守り難く開城の約成りし時、守將スチッセルは乃木將軍を旅順の一砦水師營に訪ひ、乃木將軍の二兒相續で陣沒し、老て嗣なきに至れるを聞き、双眸に涙を浮べて之を吊せしに、乃木將軍は之れ國家に殉せる者なりとて辭色少しも動かざり

しと傳ふ。蓋し彼に涙なきは涙なきに非ず、彼の涙は乾きたる涙也、索と彼は涙の人、亦た情の人也、彼が其の末子の戰死を吊せる「山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場、征馬不前人不語、金州城外立斜陽」の詩の如き、人をして一唱三唱、愴然として涙下るを禁ずる能はざらしむ。彼が其の子の爲めに一滴の涙を落さゞるは、情を抑へ心を殺して外に剛强を裝はんとするに非ず、奉公の誠は私情を顧みるに暇あらざる也。聞く、將軍は家人に嚴命して曰く「武人の家に嗣なきは奉公の常なれば、予が白骨となりて歸るを俟ち、始めて一家三人の葬式を營めよ」と。將軍が大膽にも長驅奉天を衝きしは、自ら陣頭に屍を曝さん爲めなりしとぞ。實に乃木將軍の人格の大なる所以は一身私心を捨てずして、一家を擧げて國に殉せんとの大精神の活動にありと謂ふべし。「身すてゝ國につくせと常いひし、父がをしへをよく守りけり」之れ愛子を失へる老親の心也、夫を喪へる寡婦の心也、父を失へる孤兒の心也。彼等は國の爲めには一身は愚か一家を捧ぐるも尙ほ足らざるの感を懷ける也。諸君はパリサイ人に倣ふて「我は神の爲め人の爲めに何々の働を爲し、幾千の金を献げたり」と誇顏に吹聽せんと欲する乎。我儕は此の譬喩に依りて我儕の善業は神の御前には襤褸同樣のものにして、毫も誇るに足らざる事を學ばざる可らざる也。

(二)稅吏の祈　十三

パリサイの人が聖所の前面の最も顯著なる場所に立ち、群集の目前に於て祈れる時に、稅吏は犯せる罪に責められ、深く神を畏るゝの念に充され、聖所に近づく事を憚りしが故に、「稅吏は遠に立ち」パリサイ人は其の祈の人々に看られんが爲め、天を仰ぎ双手を捧げて祈りしも、稅吏は自己の罪を恥ぢ神に向ふて面を擧ぐること能はざるが故に、「天を

も仰ぎ看す」加之、彼は心中の憂と良心の責とに堪へかねて「其の胸を拊ち」重き神罰を當然に受くべき者なることを自白して、「神よ罪人なる我を憐み給へ」と叫びける。此の「罪人なる我」とは原語にては "A Senner," に非ずして "The Senner" を意味す則ち「無二の罪人なる我」若くは「罪人の首なる我」との意味を含む。パリサイ人は自己を義人中の義人に擬し、稅吏は自己を罪人中の罪人と爲す、兩者の對照實にその妙を極む。而して「憐み給へ」てふ語も、原語にては希伯來書二章十七節に看ゆるのみの言葉にして、最も深く最も切なる意味を含む。頗ふに一般の稅吏に有勝なる惡事には彼も與りしならん、同僚輩が誰も彼も行ひつゝある所の事は假令惡事なりとも我れ獨り拔き出でて懺悔の心を發し難きは人情也。亦た往々自己の罪を其の境遇に歸し去り易きも人情也。然るに此の稅吏は斯の如くして我が罪を遁れんとする氣色路はとも

看えず、只管我が罪の惡むべきを感じて衷心より之を懺悔したるを看る。曰く「神よ罪人なる我を憐み給へ」と。是れ我儕が稅吏を以て敬神の摸範と爲すべき點也。次にパリサイ人は「他人の如く非ざるを謝す」とて常に他人を鏡として自己の姿を映せるが故に、「强索不義姦淫せず」と誇るに至る。之に反して稅吏は神を鏡として自己の姿を寫せるが故に、「神よ罪人なる我を憐み給へ」と祈るに至る。「我心鏡に映るものならば、さこそ姿の醜くからまし」、試に聖書の鏡に照して我が心の姿を寫さんに、曰く「凡そ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者也」と、人誰か殺人罪を犯さゞる者あらん乎。曰く「凡そ婦を看て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也」と、人誰か姦淫罪を犯さゞる者あらん乎。論じて茲に來らば我儕はジョン、バンヤンが刑場に曳かるゝ罪人を指さして「彼の罪人こそバンヤンなれ」と叫びし所以を悟る事を得ん。我儕は稅吏と均

しく、神よ罪人なる我を憐み給へ」と言はざるを得ざる可し。之れ我儕が税吏を以て敬神の摸範と爲すべき點也。

「我れ汝等に告ん税吏はパリサイの人よりは義とせられて家に歸りたり」、税吏は赦罪に依りて安心を得、義とせられて家に歸れるも、パリサイ人は始と同じ活氣なき冷淡なる心を以て歸れる而已。而して「彼の人よりは」とは税吏をパリサイ人に比較して彼は此よりも義とせられたりと云ふの意に非ず、其は義とせらるゝには程度なければ也。されば彼は絶對的に義とせられ、此は然らざりしとの意也。何となれば、「凡て自己を高ぶる者は卑られ自己を卑だす者は高げらるべし」而して此の譬喩は如何なる人々を敎へんとて語られしやと云ふに、九節に「自ら義と意ひ人を輕むる或人に」イエス此の喩を語れり」主は其の弟子等が心靈上の高慢と自尊に傾き、之と共に他人を輕蔑するの兆候を發見し給ひたれば、此の比喩を以て其の病を治せんと試み給へる也。今や我儕の中に茲に謂ゆる「或人」は居らざる乎。

基督之比喩畢

明治四十年十二月廿三日印刷
明治四十年十二月廿五日發行

基督の比喩

著者　八濱德三郎

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　聲醒社書店
（振替貯金五五三　電話新橋一五八七）

横濱市山下町八十一番地
印刷所　福音印刷合資會社

不許復製

星野光多君修養三書

再版 基督教思林

一名日毎の學び　朝の卷

四百二十頁　定價　金七十五錢

本書は泰西思想家の深遠なる言説を以て、斯道の眞理を闡明せるものにて、日毎に聖書の題詞一二節を説明するに、名家の良思聖想を以てしたる者なり。卷尾に附錄したる三種の索引は、書中の思想を應用せんと欲する者をして寶中物を探すが如くならしむ。思想家百七十餘人一覽表は之が應用に當り特に思想の價値をます者と云ふべし。説教家、演説者、日曜學校教師諸君には、坐右缺くべからざる良友なり。

再版 基督教談叢

一名日毎の教へ　夕の卷

四百頁　定價　金七十五錢

本書は宗教的佳話美談を以て、斯道の眞理を説明せんと試みたるもの、一年三百六十五日、日毎に聖書本文を掲げ、之を説明するに一二適切の事實談を以てする者にて、その體裁「思林」と相同じとす。書中掲載せる談話、無慮四百餘項は説教者、演説者、日曜學校教師諸君のため、材料の一小倉庫たるべし。卷尾に附錄したる二種の索引の便利なるは勿論とす。

星野光多君修養三書

新版 基督教通觀

聖日の卷

四六判五百三十頁　定價　金壹　圓

○第一、序編　○第一、宗教の必要○第二、宗教の資格○第三章宗教の活用○第四、宗教の眞價○第五、光暗の撞突。

○第二、概論篇　○第六、基督教の三大要素○第七、神の準備と人の準備○第八、基督教の使命○第九、人生の目的と基督教○第十、基督教と生活○第十一、基督教と現在境遇○第十二、基督教と人格、

○三、教理篇　○第十三、神（其一）○第十四神（其二）○第十五、人○第十六、基督教（其一）○第十七、基督（其二）○第十八、基督（其三）○第十九、救助の權能○第廿、贖罪論○第廿一、聖靈（其一）○第廿二、聖靈（其二）

○第四、基督編　○第廿三、基督問題○第廿四、基督の出生○第廿五、基督の年齢○第廿六、基督の要求○第廿七、基督の死狀○第廿八、基督の復活○第廿九、復活の能力○第卅、寶石として基督○第卅一、要石として基督○第卅二、基督の榮。

○第五、生活編　○第卅三、新生涯の始終○第卅四、生活の目的○其卅五、吾人の共働者○第卅六、生活の二種類○第卅七、聖徒の自由○第卅八、聖徒の喜樂○第卅九、聖徒の滿足○第四十、聖徒の二特質○第四十一、日毎の十字架○第四十二、始終一貫の精神。

○第六、教會編　○第四十三、教會の成立○第四十四、教會の特質○第四十五、教會の模形○第四十六、教會の生涯三段階○第四十七、教會の榮榮と其原因。

○第七、傳道編　○第四十八、傳道の精神○第四十九、傳道の實力○第五十、傳道の材料　○第五十一、傳道の成功○第五十二、傳道の責任及び利益。

宮崎八百吉君譯

アウガスチン 懺悔錄

定價七十錢
郵稅八錢

肉慾の甘樂、罪惡の苦悶、人生の血あり肉あり良心ある代表的偉人の懺悔錄なり、明確不磨の**哀別**離苦、花林孤影の**大泣哭**、清亮なる玲瓏徹底の默會在り、而して後信者不信者之を讀んで其の**聖徒的獨身**生活嗚呼是れ**自個寫眞鏡**

海老名彈正名序、渡瀨常吉君著

國體と基督教

定價二十五錢
郵稅四錢

◎加藤博士の所論を駁す◎

本書は最近我國の思想界に多少の波瀾を見へたるものにて苟も博士の著書を繙きたる者は**彼我論爭**の對比上看過すべからざるのみならず**凡そ基督教と科學及國體の關係**を知らんとするものは**是非一讀**せざるべからざる近來の**珍書**なり

加藤老博士の吾國體と基督教を**駁論**したるもの

宮川。牧野兩先生著

基督の聖訓

定價五十錢
郵稅共

牧野虎次著 前篇 **基督の人訓**

宮川經輝著 後篇 **基督の靈訓**

著者兩人が本書著述の由來を誌せる緒言に曰く、『過る初夏の候、同人數輩卓を圍んで相語る、談會ま基督教書類の欠乏に及ぶ。予等提言して曰く、乞ふ隗より始めよ、幸に我に一週間の閑暇を與へば、兩人相携へて山に入り、俗塵を離れて心身を之に捧げ、聊か協力執筆する處あらんと。座に一教友あり、忽ちこれに應じて曰く、その著作に關する費用一切は乞ふ之を辨せん、必ず決行する處あれと、約諾立ろに成れり。約に從ふて七月下旬、兩人筆を載せて有馬に至り、浴客の雜鬧を避て故らに客舍を山麓綠陰の間に撰び、夙に起き夜半に寢ね、他念なく勵みて筆を執り、倦ば出て清風に嘯き溪流に掬び、歸れば則ち机に向ふ、孜々として務むること五日、稍にして本書を稿了することを得たり。此書幸に斯道に志す人の補益となるを得ば、前述教友の賜なり』。

斯の如くにして成りたる「基督の人訓」は山上の說教を現代の思想によりて解釋したる者、「基督の靈訓」は心靈の向上に關する基督の教訓を、順序的に講述したるもの也。共に求道者必讀の書にして、又信者修養上の好侶伴たり、傳道界多事多望の今日、玆にこの好著を公にするを得るは、豈啻に吾人の幸福のみならんや

258
344

▲教會史▼　ワルチデ博士著　定價小包共二拾二圓

▲新約聖書共觀福音講解上▼　仝　定價小包共一圓二拾八錢

▲新約聖書共觀福音講解下▼　仝　定價小包共一拾一圓

▲新約聖書約翰傳講解▼　仝　定價小包共一拾一圓二拾五錢

▲新約聖書使徒行傳講解▼　仝　定價小包共一拾一圓三拾二錢

▲新約聖書羅馬書講解▼　仝　定價小包共一拾二圓

▲哥林多前後書講解▼　仝　定價小包共壹圓五拾七錢

▲耶穌の時代▼　原田助先生譯述　定價上製各八拾五錢　郵稅共六拾八錢

▲附日野眞澄編　猶太の地理氣候及曆一斑

▲耶穌の教▼　エール大學教授スチーヴンス博士著　關西學院教授松本益吉君譯　定價六拾五錢　郵稅六錢

▲日本古代史と神道との關係▼　久米邦武先生講述　定價六拾五錢　郵稅六錢

▲舊約聖書箴言講義▼　神學博士湯淺吉郎先生述　定價上製六拾五錢　並製五拾錢　郵稅八錢

▲世界一週傳道旅行▼　エヴアンゼリスト木村清松先生著　定價六拾錢　郵稅六錢

▲廿世紀日曜學校▼　田村直臣君著　定價六拾錢　郵稅六錢